

327
386

解語

山七憶心歌集

全

緒言

萬葉集は奈良朝文學の華にして又國歌の淵源として世の貴重する所なり。萬葉集二十卷 其の收むる所の歌殆五千首の作者また實に五百六十餘人 人麿赤人はいふまでもなく大伴家持笠金村等ては石川郎女など其の錦心繡腸は千種の花と亂れて其の艶を競へり 然も其の間にひゞり燦然として異彩を放つは山上臣憶良にあらずや 由來變化に乏しく纖弱に陥り易きは國歌の通弊なり 然るによくこの通弊を脱し國歌の爲に一道の光明を發揮したるは實に憶良の詠にあらずや 憶良の詠や 其の辭清新 其の調雄健 加之其の詠する所いたづらに花鳥風月に馳せずして大概世態人事にかかる これ

其明重
43.10.4
内交

實に憶良の憶良たる所にして又其の萬葉集中に異彩を放つ所
以なり
今や文華開けに開け新體詩集の出版日に月に盛なり この時
に當り殊更に憶良の歌集を撰びて世に紹介するもの豈いたづ
らに古を尙ぶのみならむや

例言

- 一、本書は萬葉集中より山上臣憶良の歌を摘み集めて註釋を施せるものなり
- 一、萬葉集の歌は總て所謂萬葉假字をもて記せり 今本書私に之を假字交り文體に改め譯したるは大に原色を損するの懼無きにあらねど全く讀者の會得を易からしめむか爲さくたくだしき註釋を避けむが爲この微意に外ならず
- 一、萬葉集には異本尠からず 從て其の文字に異同あり 其の訓讀また必ずしも一定せず 本書大體は萬葉集畧解によりたれどまゝ異本をも採用して之を記せり
- 一、註釋は平易を主とし先哲諸家の説をかれこれ斟酌して記せ

り
一本書は講習の餘暇倉卒筆を下したれば誤れる節整はぬ處尠
からじ、謹みて大方識者の正を待つ

目 録

- 在大唐時憶本郷歌
- 追和歌
- 罷宴歌
- 日本挽歌
- 令反惑情歌並序
- 思子等歌並序
- 哀世問難住歌並序
- 詠鎮懷石歌
- 宴太宰帥大伴卿宅梅花歌
- 員外思故郷歌

後追和梅歌

松浦歌

書殿餞酒日倭歌

敢布私懷歌

敬和爲熊凝述其志歌 並序

貧窮問答歌

好去好來歌

老身重病經年辛苦及思兒等歌

戀男子名古日歌

沈痾之時歌

七夕歌

詠秋野花歌

山上臣憶良

憶良の傳記は不幸にして委しく世に傳はらず 今僅に續日本紀と萬葉集とに見ゆる所によりて其の履歴の大要を語らむ

文武天皇大寶元年 遣唐少録となる

同 二年 遣唐使粟田真人に従ひて入唐す

元明天皇和銅七年 從五位下に叙せらる

元正天皇靈龜二年 伯耆守となる

同養老五年 詔によりて退朝の後東宮に侍す

聖武天皇天平年中 筑前守となり 任を終へて 歸京の後

七十餘歳にて歿せり

著述に類聚歌林あり

この他なほ萬葉集によれば、憶良は其の晩年偕老の契り淺からざりし妻におくれ、深き歎きの淵に沈み、また其の柱たのみし男子古日をさへ失ひていご涙の袖を絞り加之、老身重病年を経て、辛苦を嘗めつつ悲歎の中途にみづからも頼みなき世に別れを告げたるが如し。

憶良の傳記は畧斯の如きに過ぎず。然も其の傳記の索然たるは決して憶良の爲に悲しむに足らざるなり。憶良に貴ぶ所は全く其の地位官歴にあらずして、其の錦心繡腸にあり。而して其の錦心繡腸は遺憾なく萬葉集に發揮せられたるに非ずや。憶良博學にしてまた文に長せり。殊に其の國歌の上に振へる伎倆に至りては、音にかの有名なる人磨赤人に對して遜色なきのみならず、其の詩思文藻の清新なる點に於ては、むしろ一頭

地を抜きたりといふべし。然も人磨赤人が世に歌聖と稱へらるにかかはらず、憶良の名の殆世に忘れられたるが如きは、誠に遺憾の極といふべし。要するに憶良は儒者なり。歌人なり。不幸薄命にして、轢軻困憊の中に歿したりと雖も、奈良朝の歌人として、其の名は永く我が文學史上に朽ちざるべく、其の色香はならぬ言葉の花は、こころしなへに我が歌壇に燦爛として、異彩を放つべし。

釋註 山上憶良歌集

井上頼文著

山上臣憶良在大唐時憶本郷歌

文武天皇の大賚二年遣唐使民部卿粟田朝臣真人に隨ひて入唐したる時の歌なり

いさ子ども 早日本へ 大伴の 御津の濱松 待戀ぬらむ

○いさ子ども イザは勝ひ出す語にて口語のサアといふに同じ 子ドモは遣唐使に従へる従者どもを指していへるなるべし ○早日本へ 早く日本へ歸らむの意なり 早モのモは感動詞にて早クマアといふ程の意なり (この句萬葉古義にはハヤヤマトベニを訓ませハヤ日ノ本へとあり 唐にてよみ侍りける山上憶良としてこの歌をあけたるにはハヤ日ノ本へとあり 何れかよる侍りけらむ 今に萬葉集の訓に從ひてハヤヤマトベニを訓むべきに原書には早 ○大伴の 冠辭考には みつの濱の枕詞とし 大伴の瀬都々々志(武く雄々々て

ふ意にて御津の濱に冠らせたるにやとわれど 大伴は難波の浦の一部分の
名にして三津寺の在る邊を舊く大伴の浦とも稱したれば 大伴の浦なる御
津の濱松と云ふ義と知るべし ●御津の濱松 御津は攝津の難波津をいふ
御は美稱言 津は總て船舶の碇泊する湊をさす語なり 津は數多ある中
に難波津は殊に主要の津にて昔唐國などへの往來もこの津よりせし事なれ
ば單に御津とのみもいひしなり萬葉集中天平五年入唐使を送る歌に難波に下り
住吉の三津に船乗り云々ありて住吉津を下り
津はさいへりれどもなほ本歌の御津もこの住吉御津を指せるものなりとし なほ本書
の中なる好去好來の歌を見合すべし ●待戀ぬらむ 我等の歸るを待戀ふ
ることならむの意なり

航海の便いまだ聞けざりし當時にありては遣唐使は實に懸命の任なりしな
り従て一旦御津の濱より船出して渡唐したる者の朝夕心に離れざるはつゝ
がなく再びこの濱に着船せむことなりしなるべし されば本郷を憶ふにつ
けても先づ御津の濱を思出で御津の濱松待戀ぬらむといひ下しさて其の底
にはなつかしき妻子の切に待ち焦れ居るならむとの意を含めたるなり

山上臣憶良追和歌一首

追和歌とは前に或歌ありて後より其の歌に和して詠める歌の意なり
本歌は萬葉集卷二に 有間皇子自傷結松枝歌二首「磐白の濱松が枝を
引結び眞幸く有らば亦還り見む」 一家にあれば筈に盛る飯を草枕旅に
し有れば椎の葉に盛る」とある次に 長忌寸意吉麻呂見結松哀咽歌二
首「磐代の岸の松が枝結びけむ人は反りて復見けむかも」 磐代の野中
に立てる結び松情も解けず古思はゆ」とあるに續きて載たる歌にて要
するに有間皇子の結松につきて詠める歌なり
有間皇子は孝德天皇の皇子なるが齋明天皇の御代に帝の紀伊の温泉に
いでませる間に謀反の企ありとて執へられて紀伊の行在に送られ給ひ
き 其の途次紀伊の岩代の濱にて御食まわりし時あたりの松が枝を結
びて上の歌をよみ給ひさて其の翌日藤白といふ處にて誅せられ給ひき
皇子が眞幸くあらば復還り見むとたのみ給ひし深きちぎりも空しく

なりて獨さびしく結松の結ばれながら生立ちけむ今より思ひやるもあ
はれいと深し

鳥つ翔はなす 有あ通とひつつ 見みらめども 人ひとこそ知らね 松まつは知
るらむ

○鳥翔なす 飛ぶ鳥の如くの意なり(翔は一本に羽さしあれど翅の誤なるツバ
サはやがて鳥のことをいひ ナスは如くの意の古言なり)○有通ひつゝ 有
通とは絶えず通ふことをいふ古言にて有待有立などともいへり○見らめど
も 見らむなれどもの意にて見らめは見るらめの古言なり さて此處ま
での意は有間皇子ははかなくなり給へどもかねてのちぎりを忘れ給はで其
の御魂は飛鳥の如く天翔りて絶えず通ひつゝ松を見給ふならむをとなり

山上臣憶良罷宴歌一首

何時如何なる處の宴會なりしか明ならざれどとにかく久しく宴席に侍

し今は退出せむとて詠める歌なり

憶良等おきらは 今いまは罷まらむ 子こ哭なくらむ 其その彼か母ははも 吾われを待まちつら
むら

○其彼母も 其彼のは意紛らはしけれを彼は上の子を受けたるものとすれ
ば其の子の母もといふに同じく即ち憶良の妻をさすなり(一本には彼の字を子
ノ母ハの意と訓めて其の子あり)

日本挽歌一首

本歌は憶良が筑前守として在任中都より慕ひ來りし妻の死にたるを傷め
る歌なり

日本とあるは本歌の前に並べあげたる漢文の序及詩に對して特に書せる
ものなり 挽歌は哀傷の歌の意なり 挽歌とは支那にて送葬の時柩を挽
く綱を執りて唱ふる歌をいふ語なるを借用したるなり

目録には筑前守山上臣億良挽歌一首并短歌とあり 又本歌の末に神龜
五年七月二十一日筑前國守山上億良とあり 契沖の説に反歌の中に妹が
見し栲の花は散ぬべしとあれば五月の比よまれたるを後に七月二十一日
に人に見せらるる時書添へられたるものなるべしといへり

大王の 遠の朝廷と ちらぬひ 筑紫の國に 泣子なす
慕ひ來まして 息だにも 未休めず 月日も 未有ら
ねば 心ゆも 思はぬ間に 打靡き こやしぬれ 言
はむすべ 爲むすべ知らに 石木をも 問ひさけ知らず
家ならば 形は有らむを 恨しき 妹の命の 吾を
ばも 如何に爲よとか 鳩鳥の 二人並び居 語らひし
心背きて 家さかりいます

○大王の遠の朝廷と 遠の朝廷とは都より遠く離れたる官廳の意にて太

宰府のことを云へり朝廷とのトはトアルといふ程の意にて下の筑紫にかか
るなり 即ち大君の遠の朝廷として太宰府のある筑紫國の意なり 太宰府
のあるは筑前國にて此處も主と筑前國をさしたるものなれを廣く筑紫とい
へるなり ○しらぬひ 筑紫の枕詞なり 語の意は確ならぬを知らぬ火の燃
ゆる筑紫の意なるべし 知らぬ火は今も肥後天草の海上に燃ゆる燐火にて
有名なるが日本書紀に景行天皇筑紫にいでましし時葦北(肥後)といふ處より
船出し給ひしに日暮れ夜暗くて船を著くべき處を知り給はざりしが遙に火
光を視給ひ其の火光をたどりて漸く八代縣に着き給ひぬ さて其の火を尋
ね給ひしかども遂に場所不明ならず ここに全く人の火にあらざりしことを
知り其の國を名つけて火國といふと記せり されば知らぬ火は主として火
國(肥前)にいふべきなれど廣く筑紫にかけてもいへるなり(古典には筑紫國を白
の見ゆればシラ×ヒは野火にて野火の著くさかけていへるなり又古鏡にはシラが白にて明
の意 ×ヒは野火にて野火の著くさかけていへるなり又古鏡にはシラが白にて明
○泣子なす 親を慕ひて泣く子の如くの意 ○慕ひ來まして 億良の妻
が夫を慕ひて都より筑紫に來れるをいふ ○息だにも云々 筑紫に到着し

てしばし休息さへせぬうちへの意 ○年月も未有らねば 年月も未經され
 ばの意なり (古義に かくては言たらす 故案にもこは伊久陀毛阿其爾婆さあり
 しなるべきを上伊摩陀花周米受の伊摩陀に見まがへて寫誤れるな
 けるべしと云へり 然すれば意明にはなるべ) ○心ゆも思はぬ間に 心から眞
 實にマア思はぬ間にの意なり ユはヨリの古言なり ○打靡きこやしぬれ
 打靡きは身體を横にする様をいひコヤシはコイマシの約 コイは臥す意
 の古言にて コイ轉ブ コイ伏スなど云へり さればコヤシは臥の敬語な
 り ここは憶良の妻の煩ひて病臥したるを云へり ヌレはヌレバといふべ
 きを語勢を強むる上よりバを省きて云へる古言の一格なり ○言はむ術爲む
 術知らに 言はう様も仕様も知らずへの意 知らにのニはズニといふ程
 の古言なり ○石木をも問ひさげ知らず 問ひさげとは語り合ひて思ひを晴
 すをいふ 問フとは言問フなども云ひて物を言ふ意 サケは令放オウホウの約に
 て心の内に結ばれたる思ひを外に晴し遣る意なり さてこの句の意は憶良
 が妻なくなりて今は親しく語らふべき者も無くせめて石木にても物言ふも
 のならば語りあふべきに石木は物いふものならねば語りかはして思ひを慰

むることもならずとにて結句また語らふべき者も無く誠に淋しく悲しとな
 り ○家ならば云云 葬送を爲すして家に置きてあらばせめて其の形はあ
 るべきものをそれもかなはねば誠に悲しやとなり ○恨しき妹の命の 何
 時までもかはらじと契りし言に違ひて吾をば打棄てて行きし其の恨しき妹
 の命はなり 妹とは妻をさし命は敬稱なり ○吾をばも如何に爲よとか
 あとに残れる吾をまあどう爲よといふつもりにてかの意にて下の家さかり
 いますに續くなり ○鴉鳥の二人並び居 鴉鳥のは枕詞なり 鴉鳥はカイツ
 ムリといふ鳥にて雌雄常に打連れて共に居る鳥なれば二人並び居にいひか
 けたるなり ○語らひし心背きて 常にかはるなかはるまじ死なば諸共に
 と語らひし其の心に違ひての意 ○家さかりいます サカリは遠ザカルな
 るいふサカルと同語にて離れ行く意なり 一句の意は家を離れて山野に葬
 られかくれゆくとなり

反歌

長歌の意を打かへし又長歌に餘れる意を補ひて詠める短歌にてカヘシウ
タと訓めり（一説に反歌はしき漢土の詩賦の末に一篇の意を總括する反辭さ
ふものな添ふるこさあるより其にならひて和歌にもうつしたるない
ンカミよむべし訓しきもあり

家に行きて 如何にか吾が爲む 枕付く 妻屋さぶしく 思
ほゆべしも

○家に行きて 家に歸り行きての意なり この歌は非送を畢へて家に歸
る時によめるなるべし○枕付く 枕を付けて寝るといふ意にて下の妻屋
にかゝれり○妻屋さぶしく云云 妻屋とは夫婦相寝する閨房をいふ サ
ブシクはサビシクと同言なり 思ほゆべしものモは感動詞なり 今まで 夫
婦親しく枕を並べし閨房も定めて淋しく思はれむことよ さても悲しやと
なり

はしきよし 斯くのみからに 慕ひ來し 妹が心の術も術無

さ

○はしきよし ハシキヤシともいひ愛哉の意の古言なり ハシキは愛の
意の形容詞 ヨ又ヤは感動詞 シは助辭なり○斯くのみからに カラニ
は故になり 斯くなるばかりの事なるにといふ程の語にて即ち死ぬるばか
りの事なるものをとの意なり○術も術無さ 何とも爲む術も無き事よに
て唯死ぬるばかりの事なるものをそれとも知らで遙々と筑紫のはてまでも
吾を慕ひ來し事よ さても何とも爲む方なく悔しく悲しき事よとなり

悔しかも 斯く知らませば あをによし 國中盡 見せまじ
ものを

○斯く知らませば 豫て斯くなりて死ぬるものと知りたらばの意なり○
あをによし この句明ならず 一説にてこの語は普通奈良の枕詞なるを此
處にては直ちに奈良をさして云へるにて奈良の京地の限り盡くといふ意な

りと云ひ又一説にこの語は元來アナニヤシ(嗚呼愛哉古言)と同意の語にて此處も妻を親愛して云へるなり 此れを奈良のこととして此の歌解くべからずと云へり いづれよるしからむ 原意は俄に断定し難し されど試に言はばアヲニヨシはなほアナニヤシと同意の語と見る方穩當なるべきが此處は妻を親愛していへるにはあらで直ちに下の國中にかけてこのうるはしき筑紫の國中の名所盡くといふ意にいへるにはあらざるか ○國中盡見せましものを クヌチはクニノウチの約 國中の名所を盡く見せて置かむものをの意にてせめて此世の思ひ出に國中の名所を餘る所無く盡く見せて置かむものを今はそのかひも無く誠に悔しく悲しやとなり

妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いまだ干なくに

○棟の花は散りぬべし 棟は和名抄に棟阿布とあり 五月の頃淡紫色の花を開き歌にも多く詠めり さてこの棟は何處に在りしをさせるにや明なら

されど恐らくは筑前なる憶良の宿にありて其の妻のかねて賞愛せしものなるべし(この棟を奈良の家の木なるべし) ○いまだ干なくに 干なくのナクはヌの延びたるにて乾かぬにの意なり 妹に別れて我が泣く涙はまだ乾かざるに何時しか時たちて妹が愛で見し棟の花ははや散るべくなりたりとなり

大野山 霧立ち渡る 我が歎く おきその風に 霧立ち渡る

○大野山 筑前國御笠郡にある山なり 筑前の國府は同郡にあれば憶良は常にこの山を目に近く見しなるべし ○我が歎く 妻に死別れて歎く意なり なほナゲキといふ語は長息の約れるにて心に深き思ひある時アーと長く息つくよりいふなり ○おきその風に オキンは息嘯の意なり オキはイキ(息)と同語 ソはウンにて口をすぼめて息を吹出すをいふ オキンは此處にては歎の餘りに出づる長大息をいふ

令反感情歌一首并序

或人の惑へる情を諭して本心にたちかへらしめむとて詠める歌なり

或有人知敬父母忘於侍養不顧妻子輕於脫履自稱異俗先生
意氣雖揚青雪之上身體猶在塵俗之中未驗修行得道之聖蓋
是亡命山澤之民所以指示三綱更開五教遺之以歌令反其惑
歌曰

○知敬 知の上に不の字脱れるか又知は不に改むべしといへり○侍
養 侍の字一本に孝とあり 輕於脱履 履は總てはき物のことな
り 脱履ははき物を脱き棄つることにて少しも惜しからぬ意にいふ
史記に吾誠得如黃帝吾視去妻子如脱屣耳とあるによれり 妻子を棄つ
ること履を脱き棄つるよりも輕々しの意○異俗 異は原本に畏とあ
れど改めて書せり 世俗の凡人とは異なる意なり○揚青雪之上 心
の高くあがれる意○亡命山澤 亡命とは 籍を無くして世を遁れ

匿るる意 この世をつまらぬものと見棄て、山や澤などに遁るるをい
ふ○三綱 君臣 父子 夫婦をいふ○五教 父義 母慈 兄友 弟
恭 子孝をいふ

父母を見れば尊し 妻子見れば めぐしうつくし
えの 兄弟親族 避るえの 老 世の中は 斯くぞことわり 鶉鳥の
み 幼み 朋友の 言問交す 世の中は 斯くぞことわり 鶉鳥の
かからはしもよ 速河の 行方知らねば 穿沓を 脱
棄る如く 踏み脱ぎて 行くらふ人は 岩木より 生出
し人か 汝が名告らさね
天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大王います こ
の照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み 谷蟻の
さ渡る極み 聞し食す 國のまほらぞ かにかくに 欲
しきまにまに 然には有らじか

豊原云
此所に五
百一十脱
たりと思
ふは尋常
の考なれ
ざる小段
なる同し
落とて河
のさいふ
一句を補
へる古義
の脱はな
かしくな
るさしう
にて此句
なき方透
に勝れり

○めぐしうつくし　メグシは恤ムと同類の語にて可愛ラシ　イトホシな
どの意　ウツクシもイツクシと同語にて愛の意なり一本にうつくしの下に
あり萬葉古義には之を正しとして本文にさり入れたれどもこの間の文字
の追ひ棟前後の音體さも異なれば一般には之をさらす今も之に從へり○世の中
は斯くぞことわり　この世の中は斯く父母を尊ひ妻子をいつくしむが道理
なるぞの意なり○鵜鳥の　鵜にかかれる鳥の如く立ち離れ難くかかはる
といひかけたるなり　モチはトリモチの事にてモチノ木の皮より製し粘り
ありて鳥虫などを捕ふるに用ゐるものなり○かからはしもよ　拘泥しも
よなり　カカラハシはカカハルと同意の語　モヨは何れも感動詞なり　世
の人は其の父母妻子にかかはりて離れ難く忘れ難きことよの意なり○速河
の　この句原本には無ければこの處五言の一句有らねば句法調はぬやう
なれば恐らく一句漏れおちしものなるべしとて古義に補へるによれり　こ
の語は萬葉集中に速河の往方知らずもなどありて往方知らずといふにかか
る語なり○行方知らねば　この世の行末は如何になりゆくともわからね
ばの意なり○穿沓を脱棄る如く　ウケ沓は穿タレ沓にて穿たれ破れたる

沓の意なり　脱ギツルのツルはスツルなり　棄ツルを古くはウツルとも云
ひ其のウを省きてツルとのみ云へるなり○踏み脱ぎて行くちふ人は　穿
沓を踏み脱ぐ如く残念氣も無く無情にも父母妻子を打棄てて行くといふ人
はの意なり　チフはテフと同意の語にてトイフの約りたるなり○岩木より
生出し人か　さる無情漢はそもく父母も無く無情の岩木からにても生
れ出てたる人なるかと如何にも心得ぬさまに怪しみ咎めたる意なり○汝が
名告らさね　汝の名を御名乗りなされよの意なり　ノラサネは告りマサ
ネにてネは希望をあらはす辭なり　さて此の句は上の七言の句に續きて七
言なり　普通長歌は五言七言と述べ終りに七言七言と重ねて結ぶ定りなり
さるを斯く歌の半途にて七言を重ねたるは全く一種の體にて此處にて小段
落をなすなり
○天へ行かば汝がまにまに　この世を全く離れて別世界の天上へなりと
も行かば汝が思ふ儘になるべしの意○地ならば大王います　この大地な
らば大君ましますば汝の勝手にはならずの意なり○この照す日月の下は

普天の下はといふ程の意○天雲の向伏す極み　この句と下の句とは祈年祭の祝詞に白雲能墜坐向伏限　谷蟻能狹渡極とあるによれり　向伏すとは此方に向ひて伏す意にて遠く望めば雲の低く伏せるが如く見ゆる様を云ひて即ち遠く見渡す天の極みまでの意なり○谷蟻のさ渡る極み　谷蟻は蝦蟇のことなり　サ渡ルのサは強めていふ一種の接頭語なり　蝦蟇は如何なる地のはてまでも潜み行くものなれば谷蟻のさ渡る極みとはやがて大地の如何なる果までもの意なり○聞し食す　キコシメスといふに同じ　キコシはキカシの轉にてもと聞キマスの約即ち聞クの敬語なるが轉じては廣く知飲食などの敬語にも云へり　ヲスは食フの古言なるが廣く身に受入るる意にも云へり　さて此處の聞し食すは大君の天下を受持ちて統治せらるる意なり○國のまはらぞ　マホラのマは美稱言　ホは總て物に包まれ含まりたるをいひラは添へ辭なり　日本紀私記にはこの語を奥區と解せり　されど此處はさほどの確なる意にいひたるにはあらで唯王土の内なるその意を古語をとりていへるなるべし○かにかくに　とにかくにといふに同

じ○欲しきまにまに云云　自分の欲する儘に左様にしては有るまじきか決して左様にして有るまじきことなるぞの意なり

反歌

ひさかたの　天路は遠し　黙々に　家に歸りて、業を爲まさに

○ひさかたの　天の枕詞なり　語の意につきては種々の説ありて確ならねど日刺方の天とかくれりとの説先づよく聞えたり○天路は遠し　天上への路は遠しなり　天上へ行かば汝の思ふまゝになるべけれど天上は遠くして到底到り難しとなり○黙々に　ナホは黙止の意の古言にてかれこれと爲すただにあるを云ふ　されば此處にては穩カニ又スナホニなぞいふに當る○業を爲まさに　業を爲賜へやの意なり　ナリはナリヘヒのナリにて生業の意　爲まさにのニはネといふに同じく希望の意をあらはす古辭な

思子等歌一首并序

釋迦如來金口正說等思衆生如羅喉羅又說愛無過子至極大聖尙有愛子之心況乎世間蒼生誰不愛子乎

○金口 釋迦を全身といふより其の口をも金口といふなり ○羅喉羅 釋迦の子なり

最勝王經に普觀衆生愛無偏黨如羅怛羅愛無過子誰不愛子乎とありと

瓜喰めば 子ども思ほゆ 栗喰めば まして憊ばゆ 何處より 來りし者ぞ まなかひに もとなかかりて 安寢しなさぬ

○爪めば云々 爪は小兒の好むものなれば爪を食へば直に小兒の事を思出さるとなり ○栗喰めば云々 マシテは一層の意 憊ばゆは憊ばるの古言なり ○何處より云々 斯くまで愛らしく少しも心に忘れられぬ子といふ者は全體如何なる宿縁ありて何處より出來たる者ぞ いふかしき迄愛らしくなつかしとなり ○まなかひに 眼之間にて眼の前にといふ程の意 ○もとなかかりて もとなといふ語の語原は確に明ならされどもメツタムセウニ マザノトといふに當る古言なり 子供の様子が絶えずマザノト眼前にちらつきてといふ程の意なり ○安寢しなさぬ 安眠をして寢られぬよの意なり 安イのイは寢の意にて朝寢を朝イ 寢ぎたなきをイギタナシなどいふいと同語なり されば安イは安眠また熟睡などいふに同じ シは例のそれと強めていふ辭なり ナサヌは寢ヌの古言なり 寢ることを古くはナスともいへり(古義には不令宿にしてナはネサの縮たりたる)

反歌

銀も 金も玉も 何せむに まされる寶 子にしかめやも

○何せむに 何に爲むために貴からむとの意にてやがて何か爲むといふ
に同じ○まされる寶云云 世に勝れる寶も子に及ばむやア子に及ぶ寶
は無しの意なり

哀世間難住歌一首並序

世の中の無常にして變遷絶えず住り難きをかなしめる歌なり
本歌の末に神龜五年七月二十一日於嘉摩郡撰定筑前國守山上憶良とあり

易集難排八大辛苦難逢易盡百年賞樂古人所歎今亦及之所
以因作一章之歌以撥二毛之歎其歌曰

○八大辛苦 佛經に出でたる語にて生老病死愛別離(我が愛着する者、怨憎會(我が怨憎する者)、求不得(我が欲望する者)、五陰盛(五陰ハ五種にて人色受想行識なれば五陰盛名く)の八苦をいふ賞樂 賞心樂事にて心を慰め事を樂むの意○二毛之歎 二毛とは老て白毛の交り生ふるをいふ 左傳に宋襄公曰不禽二毛杜預曰二毛頭とあり 又潘岳が秋興賦序にも晋十有四年余春秋三十有二始見二毛とあり 契沖の説に憶良は天平五年に七十四歳にて卒せらる 此歌の左に神龜五年と有によりて逆推するに六十九歳の作なれば秋興賦の意には叶はず 左傳によりて老を歎く心を歌に作れりとすべし 九二毛之歎といへるは秋興賦のおもかげ也といへり

世間の 術無きものは 年月は 流るる如し ひとり續き
追來るものは 百種に 責依來る 少女等が 少女さ
びすと 唐玉を 手本に纏かし 白袴の 袖振交じ

紅の赤裳裾引き 立ちこらと 手携はりて 遊びけむ
 時の盛を 留みかね 過しやりつれ みなわたりか
 黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 一云 なるほ
 面の上に 何處ゆか 皺かき垂りし 一云 咲く花の 移るひにけり
 獵弓を 手握り持ちて 赤駒に しづ鞍打置き 這乗り
くの中は斯 丈夫が 男さびすこ 劔太刀 腰に取佩さ
 て 遊び歩きし 世の中や 常にありける
 少女等が さなす板戸を 押開き い辿り依りて 眞玉
 手の 玉手さし交へ さ寢し夜の いくだも有らねば
 手束杖 腰に束ねて 斯く行けば 人に厭はえ 斯く行
 けば 人に悪まえ をよしをば 斯くのみならし たま
 きはる 命惜しげき 爲む術も無し

○術無きものは 何とも仕様の無きものはの意○とり續き トリは強
 め辭にて引き續きといふに同じ○百種に云云 辛苦が種々に身に迫り寄
 來るとなり
 ○少女さびすと 少女の振舞するとの意なり サビは神サビなぞのサ
 ビと同語なり このサビの意につきては種々の説も有れどサビはスサビと
 同語にてもと進といふ語より出でたり されば少女サビとは少女の心進み
 て少女らしき振舞する意となるなり○唐玉を手本に纏かし 唐玉は美玉
 の意なり 唐の文物を尊重せし時代には總て唐の物はよき物としたるより
 必ずしも眞に唐國の物ならずとも勝れたる意に唐といふ語を蒙らせたるな
 り 纏かしは纏キ座シの約なり 古は男女共に緒に貫きたる玉を手を手に纏さ
 て裝飾としたるなり延て此處の少女等が以下句は五節の歌に縁故あり 昔朝
後には大嘗會の時にのみ行はれたるが五節には五節の舞姫さて五人の舞姫あ
れどもこの歌は蓋し本歌よりとりてつくるものなるべしといふ ○白栲の
 栲は古の布類の稱なり 白栲を普通白妙と記すは借字なりこの句より赤裳

句は原本に本文には無くて注に小字にて或有此句云云と記せるを今は一本により本文としてあげたり ○赤裳裾引き 裳は昔女の腰より下に後の方に垂れて着たる一種の衣なり ○よちこらと ヨチユラの語意明ならねど本居翁は同じ頃ほひの子等をいふといへり 又一説に齡をヨとのみいふは常に多し 予は其の約なるべしと ○時の盛を 若く盛り時代のをなり ○留みかね 留めかねといふに同じく留めむとしても留めがたき意なり ○過しやりつれ 過じ遣りたればの意なり つればとあるべきをばを省きていへるは例の語勢を強めていふ古格なり ○みななのわた 蛇の腸にて黒の枕詞なり 蛇は今ニナといふ貝にて殻黒く其の腸も黒きものなれば黒の枕詞となれるなり ○か黒き カは一種の接頭語にて青きにカ青といひ弱きにカ弱キなどいふカと同語なり ○何時の間か云云 何時のひまに白髪生ひたるならむかの意 ○紅の この句一本にはニノホナスとあり 丹の秀の意にて赤色の著しくあらはれ出でたるをいひ紅のといふと意は一つにおつべし ○何處ゆか ユはヨリの古言なり ○皺かき垂りし カキは強めていふ辭 垂ルは皺の甚しきをいへるにて皮膚の緩みて

垂るる様なるべし此の句の下に一云常なりし云と注せり 是は一本にみなの けて木文とせりしの下に横 ○獵弓を サツユミは幸弓の義なり もと獵又漁に獲物あるを幸といひ

山の幸海の幸など云へり 其の幸の弓の義にてサツユミといふ 矢にサツ矢といひまた獵夫をサツヲなどいふも皆この義より出てたるなり ○しづ鞍 しづ鞍といふもの如何なる鞍なるか明ならざれを一説に倭文鞍なるべしといへり 倭文とは古の織物にて横糸を染めて織れるものなり 其の倭文を纏きたる鞍なり一説に和名抄に纏之太久良とある下鞍にて鞍の下に布なく ○世の中や云云 世の中は常に變らずありたるか決して常なること無く變りはてたりとの意にて勇壯に樂しげなりし丈夫も何時の間にか老衰するとなり

○さなす板戸を サは例の接頭語 ナスは鳴ラスにて戸を閉づるをいふ 古の戸は多く開き戸にて開閉に音ある故いふなりと古義には閉しすなり ○い 辿り依りて イは接頭語 タドリは總て探り尋ねてものする意の語なり

○其玉手　マは美稱言　玉手は少女の手の美しきをはめていふ○玉手さし交へ　美しき手を指交はす意なり○さ寝し夜の　サは例の接頭語○いくだも有らねば　幾許も有らぬにの意なりかゝる場合のネバは皆云ふヌニの意と全く同くして一種の古格なり(即ち幾許の年をも経ざれば如此老衰せむとは思はぬにの意詞の玉緒七の巻古風の部にその證例多く出せり就て見るべし○手束杖　手に握る杖といふほどの語○腰に束ねて　杖に倚りそふさまなり　○腰のあたりに杖を握り持つよりいふ○斯く行けば　この語は下の斯く行けばに對する語にて何處へ行きてもの意となるなり(古義には古寫本舊書によりてか行けば改めたり　此處もか行けばかにかく行けばかある方自然に種々なるやうなれどさりて斯)○厭はえ　ニはレの古言にて厭はれの意なり　下の惡まえのニも同じ○をよしをば　語意確ならず　老し人をばの意なりとの説もあれど　凡はの意なりと云ふ説穩當なるが如し○斯くのみならず　ナラシはナルラシの約なり　凡この世の中は斯くばかりはかなく變りやすきものにて有るらしの意なり○たまさはる　命の

枕詞なり　語意につきては種々の説あり　今試に冠辭考の説をあぐれば　タマは魂也　キハルは極にて人の生れしよりなからふる涯を遙にかけていふ語也　故に内の限とも息内とも幾代ともつゝけたりさるを後の人命の今終る極みをいふとのみ思へるは此冠辭の意にあらず云云とあり○命惜しけど　惜しけどは惜しげれどの古言なり

反歌

常磐なす　斯くしもがもと　思へども　世の事なれば　留みかねつも

○常磐なす　常磐の如くの意　常磐は永久に不變らぬ磐の意○斯くしもがも　この儘口語に譯すれば斯様ニサマア有リタイモノデアルマアといふ程の語にて常に斯く若く壯に何時までも有りたきものなりとの意なり

シモのシは例の強め辭　モは感動詞　ガモのガは願の辭モは上のモと同じ
く感動詞なり○世の事なれば云云　無常なる此世の事なれば流るゝ歲月
變り行くすがたを留めむとしても留め得ぬ事かなの意なり

山上臣憶良詠鎮懷石歌一首并短歌

筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石大者長一尺二
寸六分圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺一寸圍一
尺八寸重十六斤十兩並皆橢圓狀如雞子其美好者不可勝論
所謂徑尺璧是也或云此二石者肥前國彼并郡平敷之石當占而取之去深江驛家二十許里近
在路頭公私往來莫不下馬跪拜古老相傳曰往昔息長足日女
命征討新羅國之時用茲両石挿著御袖之中以爲鎮懷實是御發中矣所
以行人敬拜此石乃作歌曰

○怡土郡　和名抄に筑前國怡土止郡とあり○深江村　筑前續風土
記にこの村は前原を去事一里三十四町西に有て海邊にある村なり町あ
り民家多し　前原の西の方にはこの宿馬驛なり云云とあり○子負原
筑前續風土記に今深江の町より五町ばかり西大道の南の高き處に里
民子負原と云傳ふる處あり　又萩の原といふ云云とあり○重十八斤五
兩　大寶令には廿四珠爲兩　三兩爲大兩　十六兩爲斤　とあり○雞
子　雞卵のことなり○徑尺璧　徑一尺の璧にて大なる璧をいふ
淮南子といふ書に聖人不貴尺之璧而重寸之陰時難得而易失也とあるよ
り出でたり○彼杵郡　和名抄に肥前國彼杵岐乃郡とあり○平敷
本居翁の説に或人云平敷と云は今長崎に近き浦上村平野宿と云處にて
今も赤石白石の美好きが多く出るを火打石にも又磨て緒結と云物にも
するなりと云りと○古老相傳曰云云　息長足日女命は神功皇后と申
す　古事記に　其政未竟之間其懷妊臨產即爲鎮御腹取石以纏御裳之腰
而渡筑紫國其御子者阿禮坐云云亦所纏其御裳之石者在筑紫之國伊斗村

也とあり 又筑前風土記に怡土郡兒櫻野在郡此野之西有白石二顆一
 顆長一尺二寸太一尺重卅一斤一櫻者氣長足姬尊欲征伐新羅到於此村御身有
 姪忽當誕生登時取此二顆石挿於御腰祈曰朕欲西堺來著此野所姪皇子若
 此神者凱旋之後誕生其可遂定西堺還來即產也所謂譽田天皇是也時人號
 其石曰皇子產石今訛謂兒櫻石とあり

掛けまくは あやに恐し 足姫 神の尊 韓國を むけ
 平げて 御心を 鎮め賜ふと い取らして 齋ひ賜ひし
 眞玉なす 二の石を 世の人に 示し賜ひて 萬代
 に 言續ぐがねと 海の底 奥つ深江の 海上の 兒負
 の原に 御手つから 置かし賜ひて 神ながら 神さび
 座す 奇御玉 今のをつつに 尊きろかも

○掛けまくは云云 言のはに掛けて申さむも誠に恐れ多しの意なり

かけまくのヤクはムの延びたるにて言ハムを言ハマク 行カムを行カマク
 などいふ類なり○あやには誠にまたムシヨウニなせいふ程の古言なり○神
 の尊 神功皇后を尊ひて申せるなり○韓國を カラとはもと朝鮮の古
 國意富伽羅國の稱なるが廣く三韓をも漢土をもさして云へり○むけ平けて
 ムケはムカセにて服従せぬ者を此方に向かせ従はしむる意なり○御心
 を鎮め賜ふと 懷妊し賜へる御腹を鎮め賜ふ意を大かたに云へるなり○
 い取らして イは接頭語 取らしは取りマシの約にて取り賜ふの意なり
 ○齋ひ賜ひし イハフとはもと忌といふ語より出でたる語にて總て汚穢
 を忌み謹みて爲すをいふ 此處はかの石を御裳の中に挿著し賜ふを云へる
 なり○眞玉なす 眞玉の如きの意 言續ぐがねと 言傳ふる爲にとての
 意なり ガネはガニとも云ひノヤウニまた爲にといふ程の古言なり○海の
 底奥つ深江 海の底奥つは深江をいはむ爲の序詞なり 奥つのツは天ツ
 風沖ツ浪なせのツと一つにてノといふ程の辭なり○海上の 海邊の意な
 り カミは邊の意にて枕の邊を枕上などいふ類なり○神ながら 神その

儘にといふ程の意にて總て神の御所業の上にかけて崇め申す語なり○神さ
び座す 神さびのサビは上の少女さびの處に云へる如くスサビと同語に
て即ち神のふるまひといふ程の語なるが此處はかの石のいかに神聖に神
々しくあるさまを云へるなり○奇眞玉 クシは奇しくあやしき意○今の
現に ヲツツはウツツと同語にて現在の意なり ウツツといふ語は今一
般に夢の如く正氣ならざるを云へどもとは夢又死に對して其の反對に現在
なるをいふ語なり 此處も其の意にて今現在にといふ程の意なり○尊さる
かも ロは助辭 カモはカナと同じく感動詞なり

も 天地の 共に久しく 言續げど この奇御玉 敷かしけらし

○天地の このノはトといふに通ひて聞ゆる辭なるがもと天地の久しき
と共に久しくといふを略せるいひかたなるべし○敷かしけらしも 敷き

座しけるらしもなり 敷くは地に敷き置く意 モはマアといふ程の感動詞
なり

右事傳言那珂郡伊知郷蓑島人建部牛麻呂是也

右の添書は前の鎮懐石の事は建部牛麻呂といふ人の傳へ言へるを聞き
て記したるものなりとの意をことはれるなり

○那珂郡 和名抄に筑前國那珂郡とあり○伊知郷 詳ならず○

蓑島 筑前續風土記に那珂郡蓑島住吉の南にある村の名也今は住吉
の枝村なり云々○建部牛麻呂 傳詳ならず

宴太宰帥大伴卿宅梅花歌

こは原本には歌の下に三十二首並序の六字ありて天平二年正月十三日太
宰帥の宅にて宴會を開きたる時集へる人々園梅を詠したる三十二首をあ
げたるなるが此處には其の中より筑前守山上大夫と注したる一首をぬき

て載せたるなり

○太宰帥 筑前なる太宰府の長官をいふ○大伴卿 大伴旅人にて大伴家持の父なり

春はるされば 先まづ咲く宿やどの 梅うめの花 獨ひとり見みつつや 春はる日暮ひしさむ

○春されば 春になればの意 夕になればを夕サレバといひ秋になればを秋サレバなどいふに同じ○先づ咲く 百花に先きだちて第一に咲く意なり 獨見つゝや云々 このめでたき梅の花を獨のみ見つゝこの永き春の日を暮すべきかは 獨見つゝ暮さむは誠に惜しければ今日の如く思ふとち諸共に賞愛しつゝ日を暮さむととなり 見つゝは見つ見つにて繰りかへし切に見る意 ヤハは所謂反語なり

員外思故郷歌兩首

員外は數の外の意なり この歌は前の梅花三十二首の次に載せたる歌にて前の三十二首以外の歌といふ意なり 憶良の名は別に記されざれども其の作なる事疑なきが如し 故郷とは京を指せるなり 久しく筑前に在任して京を戀しく思ひて詠めるなり

我わがが盛さかり いたく降くだちぬ 雲くもに飛とぶ 藥くすりはむさも 復またをちめ
やも

○いたく降ちぬ イタクはイトドと同じく甚しくの意 降チは降りの古の古言にて此處にては齡の傾き衰へたるをいふ○雲に飛ぶ藥云々 雲に飛ぶ藥とは仙藥のことなり 列仙全傳二に劉安高帝孫封淮南王好儒術方技有八公往詣之遂授丹經及三十六水銀等方云々八公告安曰可以去矣於是與安登山大祭埋金於地白日昇天焉所乘置藥鼎鷄犬舐之並得輕舉鷄鳴雲中犬吠天上と

あり この故事より出でたるにて雲の上に飛び登ることを得る仙薬なり
此處は其の仙薬を服するとももの意なり ○復をちめやも フチとは何事に
てももとへ返る意なり 此處にては老たる身の昔へ返りて若がへるをいふ
ヤモのヤは反語 モは感動詞なり たとひ仙薬を服すとも又若く壯なり
し昔に若返ることのあらむやマフ再び若返ることは叶はずさても口惜しき
事よとなり

雲に飛ぶ 薬はむよは 京見は いやしき吾身 またをちめ
べし

○薬はむよは ヨはヨリの古言にて仙薬を服するよりはの意 仙薬を服
せば或は若がへりぬべけれど其の仙薬を飲まむよりはとなり ○いやしき吾
身 賤しき吾身にて凡夫といふ程の意にいへるなり(古義に古米卑賤吾身て
非ずべし)さらば吾身卑下ていふべき所にあらぬべしはなり今按にイヤシキは連ね
なるべし)さらば吾身卑下ていふべき所にあらぬべしはなり今按にイヤシキは連ね

いふべき所にあらぬべしに同じいへり 雲に飛ぶ薬さほよく思ふに此所は吾身を卑下て
にふてこれ上より殊更に凡夫の意を用ゐたる所ないひなしたるもの ○復をちめべし
朝夕戀慕ひ居る京さへ見たらばうれしさに老衰へたる吾身もまた若く壯
なりし昔に若がへることもあるべしとなり

後追和梅歌四首

後よりかの梅花の歌に和して詠める歌の意なり
この歌も憶良の署名は無けれど其の作なるが如し

残りたる 雪に交れる 梅の花 早くな散りそ 雪はけぬと

○早くな散りそ 早く散ること勿れの意 ○雪はけぬとも ケヌは消ヌ
にて消エテシマウトモといふ程の意なり

雪の色を奪ひて咲ける 梅の花 今盛りなり 見む人もが

○見む人もがも 見む人も有ればよきにマアといふ程の意 ガは願の辭なり

我宿に 盛りに咲ける 梅の花 散るべくなりぬ 見む人も
がも
梅の花 夢に語らく みやびたる 花と吾思ふ 酒に浮べこ
そ

○夢に語らく ヌメを古くイメと云へり イは寝の古言 メは見エの約りたるにて即ち寝たる中に見ゆる意なり 語らくのラクはルの延はりたるにて語ルハといふ程の意なり ○みやびたる 風雅なるの意なり ○酒に浮

べこそ 酒に浮べて賞愛し賜への意 ヌソは普通のオソと異なりて希望の意の古き辭なり
契沖の説に是は梅花の精靈の娘子などに化して夢に入てかく告たるやうなれどあたらしくいはいはむとてまうけていへるなるべしと云へり

山上臣憶良松浦歌三首

歌の末に天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上とあり この三首の歌を人のもとに見せに贈れる時の書牘のまゝを載せたるなり

憶良誠惶頓首謹啓憶良聞方岳諸侯都督刺史並依典法巡行部下察其風俗意内多端口外難出謹以三首之鄙歌欲寫五藏之鬱結其歌曰

○方岳諸侯都督刺史 おしなべて言へば此處は地方の官吏といふ程

の意に用ゐたるなり 方岳は四岳の事にて四岳とは堯舜の頃泰山(東岳)衡山(南岳)華山(西岳)恒山(北岳)の四山の地方に置きたる官にて地方の諸侯を統率せしものなり 都督は時代によりて沿革あれども唐の初には諸道に都督府を置き後には節度使と改めたるが大抵邊防を職とせり 刺史は治民の官なり 唐初には州郡に置き郡に太守といひ州に刺史と云へりと ○典法 規則また法則といふ程の意 ○五藏 肝心脾肺腎の五藏のことなるが此處は唯胸中といふ程の意なり

松浦縣 佐用姫の子が 領布振りし 山の名のみや聞きつつ 居らむ

○松浦縣 和名抄に肥前國松浦郡萬豆良とあり ○佐用姫の子が領布振りし 佐用姫の子といふ語は親みていへる語なり 領布は肩布とも書き和名抄に頰布婦人項上傷也と記せり 其の製作は明ならねど婦人が項に

かけたる細き布帛なるが如し 一説にかの天女などの繪に其の頭の周りに細き帯の如き布のたゝなはれるはこの頰布の風に吹けたる形ならむと又ヒソといふ稱はヒラメク物なるより出でたる如し さてこの佐用姫の故事は肥前風土記に出でたり 今其の要を譯すれば 松浦縣の東三十里に峽嶺あり 最頂に半町ばかりの沼あり 俗に傳へて云ふ 昔宣化天皇の御世に大伴狹手彦を遣して任那國を鎮めしめ給ひき 狹手彦命を奉して此處を經過したるに篠原村といふに乙等比賣(佐用姫の)といふ娘子あり 容色殊に勝れたりければ狹手彦之を娉ひて婚せり 狹手彦出發するに及び離別の日乙等比賣この峯に登り夫を戀ひ帳を擧げて招けり 因りて名づくると 又萬葉集にもこの歌の次に詠領布(か)嶺歌 とて 遠つ人松浦佐用姫夫戀ひに領布振りしより負へる山の名 といふ歌を載せたり ○山の名のみや云々 其の名高き山の名のみを聞きつつ居らむかさても殘念なりとの意にて何かと事繁くして名高き山をも行きて見ることを得ざるを歎きたるなり

足姫

神の尊の

魚釣らすと

御立たしせりし

石を誰見さ

○足姫 息長足姫にて即ち神功皇后を申す○魚釣らすと 魚を釣り賜ふとてなり ナとは元來副食物即ち菜の稱なるが魚を副食物とする上よりナとも云へり サカナと云ふも酒ノ菜にて酒の副食物には魚類殊によろしければいへるなり さてこの句一に「鮎釣ると」とあり○御立たしせりし 御立ち賜ひしの意なり タタシはタチマシの約 セリシは 爲リシなり○石を誰見さ 其の石を誰が見たるぞ 我はまだ其の名高き石をも見ることを得ず さてく口惜しき事かなの意なり

さてこの石の事は古事記に神功皇后三韓征伐に出立たせる事を記せる條に亦到坐筑紫末羅縣之玉島里而御食其河邊之時當四月之上旬爾坐其河中之磯拔取御裳之糸以飯粒爲餌釣其河之年魚故四月上旬之時女人拔裳糸以粒爲餌釣年魚至于今不絶也とあり 又一書に肥前國松浦郡浮島と玉島川の間の

百日しも 行かぬ松浦路 今日行きて 明日は來なむを 何か障れる

松原に大石あり 其石方七尺ばかりむらさき石と俗によべり 此石の上に女釣をたるゝ時は鮎魚を多く得 男釣すればかつて得ずといへり 昔神功皇后三韓退治の時此石上に立てうけひて釣し給ひしよし云傳へたりとあり

○百日しも云々 百日もかゝりて行くべき程にもあらぬ松浦への道程との意なり○今日行きて云々 今日行けば明日ははや歸りて來む程の近き處なるにの意○何か障れる 何の障ありて行くことの出來ぬならむ 別に體したる障ありといふにあらぬごなは事に紛れて行くことの出來ざるは如何にも口惜しき事よとなり サヤレルはサハレルの古言なり

書殿餞酒日倭歌四首

太宰帥大伴旅人卿が大納言となりて京に歸り上る時の送別の歌なり
歌の末に天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上と記せり
書殿は後世の書院のこと餞酒は送別の酒宴なり

天飛ぶや 鳥にもがもや 京まで 送り申して 飛び歸るもの

○天飛ぶや 空を飛ぶよといふ程の意にて鳥にかゝるなり○鳥にもがもや 口語に鳥ノ身デマア有ツテホシイマアといふ程の意なり ガは願の辭なり 二つのモ又ヤは何れも感動詞にて斯く重ねて云へるは其の切なる情をあらはしたるなり 百人一首に 世の中は常にもがもな渚漕々海の小舟のつなでかなしもとあるモガモナと殆同じ用法なり○送り申して 申すといふ語はもと言フの敬語なるが此處は誰かがめていへるにて送りまらせてといふ程の意なり○飛歸るもの 君を京に送りまらせて直にま

た飛びて歸らむものをとの意なり

人皆の うらぶれ居るに 龍田山 御馬近づかば 忘らしなむか

○人皆の 總の人の意なり 原本には比等母彌能とあれどそれにては聞えがたく本居翁が母彌は彌那を下上に誤りまた彌を彌に那を母に誤れるなるべしとの説に従ひて譯せり○うらぶれ居るに ウラブレはウラワブレなり ウラはうら哀し うら淋しなごいふウラにて心の意 ワブレは詫シと同義の語にて心に物を思ひ樂しまぬ意なり さればウラブレは心から樂まぬことにて此處は人々の大伴卿と別れて快々として樂しまず居るにの意なり○御馬近づかば 大伴卿の御馬京に近き龍田山に近づかばとなり○忘らしなむか 忘らしは忘れましの約 忘れ賜ふならむかの意なり 京に歸る喜びに我等の事は忘れ賜ふならむかとなり

言ひつつも 後こそ知らめ ともしくも さぶしけめやも
君いまさずして

○言ひつゝも云々 君に別れて淋しくと言ひつゝも誠の淋しさは後に
至つてこそ深く思ひ知るならむの意(新は阿の誤にて有ウメなるべし一説に)
○ともしくも云々 ともしくは原本には等乃斯久母とあれどさては意聞
えず 略解には乃は母の誤にてトモシクと訓み其の意は乏しく即ち少しく
にて此處は少しく淋しからむや大に淋しかるべしの意と解けるに從へり(居本
至りて大に淋しかるべしの意とセリ されど原本に等乃とあるを志万の誤とす
よりは等母の誤と略解の誤に從へり)さて一首の意は 君に別れて淋しくと口
に言ひつゝも誠の淋しさは後に至つてこそ深く思ひ知るならむ 親しみな
しみし君座さずしては如何で常座少しばかりの淋しさならむや實に言はう
様も無く淋しく堪へられざるならむとなり

萬代に いまし賜ひて 天の下 申し賜はね 朝廷去らずて

○天の下申し賜はね 天の下申すとは天下の政事を奏する意にて即ち大
伴卿の大納言となりて天下の政を執るをいふ 賜はねのネは例の希望の辭
なり

敢布私懷歌三首

この歌も前と同時の作なり 契沖の説にこれも同じ時億良のよまれたれ
どもささの歌は離別の情をのべ此歌どもは七十にあまるまで外任にをる
ことをうれへて大伴卿の吹擧をあふぐなりと

あまさかる 鄙に五年 住ひつつ 京のてぶり 忘れえにけ
り

○あまざかる ヒナの枕詞なり 語の意につきては諸説ありて確ならね
 を試に一説をあぐれば アメは天 サカルは遠ザカルのサカルと一つにて
 隔たり離るゝ意なり されば天に離る日といふ意にいひかけたるものなり
 と○部に五年 部とは京に對して云へるにて此處は筑前をさして云へる
 なり 國守の任限は大寶令に六年に定められ慶雲三年に四年とし天平寶字
 二年にまた令制に復して六年に改められたり されば天平二年はいまだ任
 限四年の制なるにこゝに五年とあるは赴任の年よりおほよそに云へるか若
 しくは延任任限満て後なほに居るな云ふなりならむか○京のてぶり テブりは風俗の意な
 り○忘らえ 忘れの古言なり 京の風俗も忘れはつるまで部に久しき
 間在任したりとて暗に歸京を望む意をほのめかせるなり

斯くのみや 息づき居らむ あらたまの 來經行く年の 限り
 知らずて

○斯くのみや云々 息づくとは歎息の意なり 京を戀ひつゝ斯様にばか
 り何時までも歎息して居るべきことか さても口惜しやとなり○あらたま
 の 年の枕詞なり 語意につきては定説なし 或は新間の意なりと云ひ
 或は萬葉集中に荒玉また璞なを記せる意にて璞うすを砥こにかけて磨くといふよ
 りいひかけたるなりと云へり○來經行く年の 移り經行く年の限りを知
 らず何時までもの意なり

我が主の 御靈賜ひて 春さらば 奈良の京に 召さげ賜は
 ね

○我が主 大伴卿を指す○御靈賜ひて 御蔭を蒙りてといふ程の意な
 り○春さらば 春にならばなり○召さげ賜はね 召し上げ賜へにて呼
 ひ上せ賜はれの意なり ネは例の希望の辭なり

筑前國司守山上憶良敬和爲熊凝述其志歌六首并序

原本にはこの歌の前に大典麻田連陽春爲大伴君熊凝述志歌二首あり 本歌は其の歌に和して憶良の詠める歌なり

大伴君熊凝者肥後國益城郡人也年十八歲以天平三年六月十七日爲相模使某國司官位姓名從人參向京都爲天不幸在路獲疾即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也臨終之時長歎息曰傳聞假合之身易滅泡沫之命難駐所以十聖已去百賢不留况乎凡愚微者何能逃避但我老親並在菴室待我過日自有傷心之恨望我違時必致喪明之泣哀哉我父痛哉我母不患一身向死之途唯悲二親在生之苦今日長別何世得覲乃作歌六首而死其歌曰

○相模使

昔相模節として毎年七月禁中に行はれたる公事あり これ

につきて諸國に相模人を召しに遣さるる使をいふ 公事根源に 是は諸國の供御人をめしあつめて七月に相模の節といひて天子の御覽する事なり 先十六七日のあいだに召仰あり 上卿勅を奉て左右の次將に相模あるべきよしをめしおはせらる 左右の近衛方をわけて國々へ使をくだして相模をめす 是を萬葉にもことり使と申也とあり ○身故 死亡の意なり契沖の説に身の下に物の字をおとせるなるべし 物無也 故事也 死すれば又事を能する所なければ物故といふといへり ○假合之身 佛書に四大假合といふ事見えて地水火風を假に合せたる身の意にて即ち人の身體をいふ ○喪明之泣 目を泣きつゝす程の歎をいふ ○觀 父母の安否を問ふをいふ

うちひさす 宮へ上るこ たらちねの 母が手離れ 常知
らぬ 國の奥處を 百重山 越て過行き 何時しかも
京師を見ひと 思ひつつ 語らひ居れご 己が身し 傷

はしければ 玉鉾の 道の隈みに 草手折り しはどり
敷きて どこじもの うちこひ伏して 思ひつつ 歎き
伏せらく 國にあらば 父どり見まし 家にあらば 母
どり見まし 世の中は 斯くのみならし 犬じ物 道に
伏してや 命すぎなむ 一云 我がよ道

○うちひさす 宮の枕詞なり うちひは麗しき日にて麗しき日の刺す
宮とかかるなり 古く朝日の日照る宮夕日の日がける宮なと云ひて日のよ
くさすことを以て宮をたたへたること多ければなりと○宮へ上ると 都
へ上るとての意なり ミヤコといふも宮所の義なれば京を單に宮ともいひ
しなり○たらちねの 母にかかる枕詞なり 語意につきては確説なけれ
を普通タラチは日足ラシにて小兒を養育する義 ねは親みていふ語なりと
せり(この句原本には多羅知新夜ヲナホノなるべしとの説に今は一説にこの新は麗の
誤夜は一本に能さわれはタラチナホノなるべしとの説によりて改め記せるなり)

○常知らぬ云云 平常見も知りもせぬ國の遠き處をの意なり○語らひ居
れど 同じ旅のつれの 語り合ひて楽しみ居れとの意○巳が身し
シは例の其と強く指す辭にて何よりも自分の身體がサといふ程の意○傷
はしければ 病み煩ひて太儀なればの意○玉鉾の 道の枕詞にて杵の
身とかけていへるなり○道の隈みに クマといふ語は種々に用ゐらるれ
ど道の隈とは道の曲りて入込める處をいふ ミはビともいひ邊の意なり○
しばとり敷きて シバは原本に志婆と假名にて記せり 古義には柴と解
したれどなほ和名抄に萊草和名之波とあり又しば草ともいふ方にて藜オウゴンなどの雜
草を指せるものなるべし○とこじ物 床の如くの意なり シモノといふ
語源は確ならねを様ノといふ程の意なりと(原本には等計自物とあれど計は許
てり又一説には等し箇の誤に)○うちこひ伏して シチは強め辭 ユイフシ
は轉臥の意の古言なり○歎き伏せらく ラクはルの延ひたるにて伏せる
やうはといふ程の語勢なり ころは序に長大息曰とあるにあたり○斯く
のみならし ナラシはナルラシの約 世の中は斯くばかりはかなくかな

しきものなるらしの意○犬じ物 犬の如くなり 道に伏してや云云
道路に倒れて命終るべきことなるかさても口惜しく悲しやとなり

たらちねの 母が目見ずて たほほしく いづち向きてか
吾が別るらむ

○たらちねの 原本には多良知遅能とあり 遅は一本に斯とも子ともあ
り 又遅は進の誤なるべしともいへり されど今は冠辭考の説により舊本
に泥とあるによりて記せり○おほほしく オホホシは總て物の明ならず
覺束なきをいふ語なるが此處は心の結ばれて憐々たる意なり○いづち向き
てか云云 何地へ向ひてか冥途へ別れ行くべき いかにも悲しく覺束な
くて行くべき方も覺えずとなり

常知らぬ 路の長路を くれくれと 如何にか行かむ 糧は

無しに

○常知らぬ路の長路 常知らぬ路とは冥途をさして云へり 長路をナ
ガテといふは繩路をナハテといふに同じ○くれくれと クレは聞き意に
て開路を覺束なく辿り行くさまをいふ○糧は無しに 道中に携帯すべき
食糧も無しにの意なり カリテは乾飯の料の意にてカレヒにする米をいふ
カテといふもカリテの約なり

家に在りて 母がどり見ば 慰むる 心は有らまし 死なば
死ぬごも 一云 後は死ぬごも

たとひ定命にて死なば死ぬとも爲む方無けれどもせめて我が家に在りてい
つくしき母の吾を取見賜はば我が心の慰むことを有らむを今はそれもかな
はず さても苦しく悲しやとなり

出て行きし 日を數へつゝ 今日今日と 吾を待たすらむ
父母らはも 一云 母がかなしき

○今日今日と云云 今日には歸るか今日はもどるかと日々に吾を待ち賜ふ
ならむ其の父母はまわといふ意にてへモの感動詞の中にはいひ知らぬ無量
の感慨もれり 假りに身を熊疑の地に置きて瞑想せば其のあはれに悲し
き情緒は綿々として盡きざるべし

一世には 二度見えぬ 父母を 置きてや永く 吾が別れな
む 一云 相別れなむ

○一世には云云 一世はこの世のことなり この世にはまた二度相見る
事もならぬ其の父母を後に留置きて吾は永く冥途に別れ行くべき事か さ
ても悲しく名残惜しやとなり

契沖が六首ながら熊疑が本意をよく得て孝の心深くあはれによまれたりと
いへる實にことわりなりや

貧窮問答歌一首並短歌

貧困者の窮状をよめる歌にてけだし億良の作中最よく其の獨得の伎倆を
發揮せるものなるべし

問答の文字につきて或は自問自答なりと云ひ或はあらずと云ひて説かれ
ごとにかく本歌は二段に分れ前段に貧困者の窮状は如何と問ひかけ後段
に其の窮状を述べたるものにて問答體の歌なり

風雜り 雨降る夜の 雨雜り 雪降る夜は 術も無く
寒くしあれば 堅鹽を ざりつつしろひ 糟湯酒 うち
すすろひて しはぶがひ 鼻ひしひしに しかこあらぬ

鬚かき撫でて 吾をおきて 人は有らじと 誇るへど
 寒くしあれば 麻衾引被ふり 布肩衣 有の盡 着
 襲へども 寒き夜すらを 吾よりも 貧しき人の 父母
 は 飢る寒からむ 妻子どもは 乞ひて泣くらむ この
 時は 如何に爲つつか 汝が世は渡る
 天地は 廣しといへど 我が爲は 狭くやなりぬる 日
 月は 明しといへど 我が爲は 照りや陽はぬ 人皆か
 吾のみや然る わくらはに 人さはあるを 人並に
 吾も作るを 綿も無き 布肩衣の 海松の如 わわけさ
 がれる かかふのみ 肩に打懸け 伏慮の 曲慮の内
 直土に 藁敷敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足
 の方に 圍み居て 憂ひ吟ひ 竈には 煙吹立てず

餌には 蜘蛛の巢かきて 飯炊く 事も忘れて 鵲鳥の
 のごよび居るに いこのきて 短き物を 端截ると
 云へるが如く 答取る 里長が聲は 寢屋處まで 來立
 ち呼びぬ 斯くばかり 術無きものか 世間の道

○術も無く 何とも仕様も無くなり ○堅鹽をとりつつしるひ 堅鹽と
 は所謂燒鹽のことにて燒き堅めたる鹽なればいふなるべし ツンシロヒは
 ツンシリの延言なり ツンシルとは類聚名義抄に唆ツ、シル小食ともあ
 りて總て物を少しつゝ噛み切りて口に入るる様をいふ古言なり 此は肴
 とては何も無ければ僅に塩を嘗めて酒を飲むさまなり ○糟湯酒うちする
 ひ 糟湯酒とは酒糟を水に漬て煮たるものなり ススロヒはススリの延言
 なり 賊の酒も無ければ僅に糟湯酒をすゝりて寒さを凌ぐさまなり ○し
 はぶがひ シハブキの延言なり シハブキは咳嗽にて即ちセキのことな
 り 此處は糟湯酒にむせて咳をするさまなり ○鼻ひしひしに 語意確な

らされ、略解には曉あやなり はなひしはなひしと重ねいふを略きていへりと解きたり ハナヒルはクサメ(ツシヤ)をする意の古言なれば此處は頻りにクサメをする様を云へるなるべし(一説に古く鼻の塞るをハナヒヒといへば此處は精に鼻の鼻の鼻に入りて鼻の痛むハナヒヒといふなりといひ又一説に鼻ゆる事あるを云なるへしこいへり) ○しかとあらぬ 確に充分ならぬ意にてここは鬚の薄く粗なるをいへり ○吾をおきて云云 吾を除きては他に人物は有るまじ 吾こそえらきものと誇るとなり 糟湯酒に意氣軒昂せるさま見るが如し 誇口へドは誇レドの延言なり ○引被ひかふり カガフリはカフリまたカムリの古言なり ○布肩衣 布にて作れる粗末なる肩衣なり 肩衣とは袖なくして肩につみ着る一種の衣なり ○有の盡 有る限り皆の意なり ○寒き夜すらを 夜すらは夜さへといふ程の意ヲはヨといふ程の感動詞なるべし ○汝が世は渡る 如何にして汝はこの世を過し渡るぞとなり さて此處にて七言を二句連ねて一段落となせざるなり

○天地は云云 以下作者が貧困者に代りて其の窮状を述べたるなり 之を作者自身の上を述べたるものとせる説もあれどなほ上の如何にしつつか

汝が世は渡ると問ひかけたる語勢より見ても此處に吾とあるは上の汝に對して問ひかけられたる貧困者の代名詞と見る方妥當なるが如し ○人皆か吾のみや然る 世の人皆然るか或は吾唯一人のみ斯く不幸なるかととなり ○わくらはに 稀にまたタマタマニの古言也 ○人とはあるを 人と生れてあるものをの意 ○人並に吾も作るを 世間の人並に吾も田島を作るものをの意 ○海松の如わくけさがれる 海松は海中の石上に生ずる水草にて枝幾條にも分れて生ずるものなり ワツケは破れ亂るゝの意の古言なり 此處は衣が海松の如くに破れ下れるをいへり ○かゝふ カカへとも云ひ總て絹布の破れて廢物となれるをいふ 今ボロといふに同じ ○伏塵 押伏せたるやうなる低く卑しき小屋なり ○曲塵 柱なを朽ちてよるばひゆがめる小屋なり ○直土に糞敷きて 床も何も無く直に土の上に糞を敷敷きてなり ○足の方に アトは足處の義なり 古く足をアと云へり ○憂ひ吟ひ サマヨヒは呻吟の意の古言にてウメキ歎く意なり ○飯には 蜘蛛の巣かきて 飯は和名抄に飯和名古炊飯器也とあり 上代には一般

に日常の飯は強飯にて飯にて蒸したるなり 飯に蜘蛛の巢をかけたるは即ち絶えて飯を用ゐること無きを示すなり 飯を用ゐること無きはやがて飯を炊くこと無きを示すなり ○飯炊く事も忘れて 一日もかくべからぬ命の種の飯を炊く事さへ忘れたりとなり されど實は忘れたるにあらず 炊く事能はざるなり 殆忘れたるが如きまで絶えて炊く事無きなり 忘れての一語悲惨の極みをつくして殊にあはれ深し ○鶴鳥の 下ののどよびといふにかゝる枕詞なり 鶴は深山に棲む鳥にて梟の類なり 和漢三才圖會に其の鳴く聲休戚といふが如しとあり ○のどよび居るに 咽聲に呻き歎きつゝ居るにの意なり ○いとこのきて イトドシクといふに同じく甚しくの意なり (註源は明ならされど一説にいさぬけてにてつこも) ○短き物を端截る 當時の諺にて今泣面に蜂などいふと同じ意なり ○管取る里長の聲 シモトは一般に稚く細き木枝をいふ語なるが此處は刊具に用ゐる管杖をさして云へるなり 里長は即ち村長なり 大寶令の戸令には凡五十戸爲里 每里置長一人とあり 此處は里長が管杖を手にして田租などの滞れるを責

め促すさまなり ○斯くばかり云云 あはれこの世の中は斯程までも爲む方なく難儀なるものなるかとなり

世間を うしとやさしと 思へども 飛立ちかねつ 鳥にし
有らねば

○うしとやさしと ウシは愛しなり ヤサシは耻かしの意なり ○飛立ちかねつ云云 この世を飛び去りたく思へども身は鳥にあらざればそれも叶はず さても悲しく苦しやとなり

好去好來歌一首並短歌

この歌は天平五年三月遣唐大使多治比真人廣成に贈れる歌にて本歌の末

に天平五年三月一日 冥宅對面 獻三日 山上憶良謹上大唐大使卿記室とあり (冥宅對面云云)

紀の事なり 大使船に直に面會し三日にこの歌を獻りたる意なり 記室は香
好去好來は好く行きて好く歸り來れの意にて本歌の末に ささくいまし
てはや歸りませ とある意によりて名づけたるなり

神代より云傳けらく そらみつ 倭の國は 皇神の
いつくしき國 言靈の 幸はふ國と 語り繼ぎ 云つがひ
けり 今の世の 人も盡 目の前に 見たり知りたり
人多に 満ちては有れども 高光る 日の御朝廷 神
ながら 愛の盛りに 天の下 奏し賜ひし 家の子こ
選び賜ひて 勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣
はされ 罷りいませ 海原の 邊にも奥にも 神留り
うしはぎいます 諸の 大御神等 船の軸に 導き申し
天地の 大御神等 倭の 大國靈 ひさかたの

天の御虚ゆ 天翔り 見渡し賜ひ 事了り 還らむ日に
は 又更に 大御神等 船の軸に 御手打掛けて 墨
繩を 延たる如く 阿庭可遠志 值嘉の岬より 大伴の
御津の濱邊に 直泊てに 御船は泊てむ つつみ無く
幸くいまして 速歸りませ

○云傳けらく 云傳へけるはの意なり ツテはツタへの約言 クラクは
ケルの延言なり ○そらみつ 倭の枕詞なり 語の意義につきては異説も
あれど舊來多くは日本紀の神武天皇の巻に 倭速日命乘天磐船而翔行大虚
也呪是郷而降之故因目之曰虚空見日本國矣とあるによりて虚空より見つ
意なりとせり ○倭國 ここは日本國の總稱なり ○皇神のいつくしき國
皇神のスメは尊稱言なり イツクシキは嚴シキといふに同じ 皇神の嚴
として鎮り守り座す國の意なり さてここにこの事を云出でたるは遣唐大

使の航海も皇神の守護によりて平安なるべきことを言はむとてなり○言靈の幸はふ國　言靈とは言語に備はれる靈徳をいひ幸はふとは幸福を生ずる意なり　即ち我が國語には微妙なる靈徳ありて其の靈徳によりて其の言語のあらはす事に幸福あらしむる意なり　さて此處にこの事を特に云出でたるは今斯く遣唐使に對し無事平安に使命を了へて速く歸りませと言祝すれば所謂言靈の幸ひにより必ず其のしるしありて平安なるべきことを聞かせむとてなり○云つがひけり　ツガヒは繼ぎの延言なり○人多に満ちては有れども　朝廷に人物は數多あれども意にて其の多き人物の中より特に君を抜き出で、と下の選び賜ひての句に續くなり○高光る　天高く光る意にて口にかかる枕詞なり　日の御朝廷　天皇は日神即ち天照大神の御末にませば日の御子と申しまた天位をも天つ日嗣と申せり　日の御門は即ち天皇の朝廷の意にて此處はやがて天皇の事を申すなり○神ながら上にいへり　神また天皇の御所業の上に申す崇敬言なり○愛の盛りには愛づる事の盛りにの意にてこゝは天皇が盛りに其の功徳を賞愛せらるゝ

餘りにといふ程の意にて下の選び賜ひてにかゝるなり○天の下奏し賜ひし家の子と　天の下奏すとは天下の政を奏すことにて即ち天下の政を執る意なり　遣唐大使多治比廣成は左大臣正二位島の子なり　されば此處は昔て左大臣として天下の政を執りし家の子として特に廣成を選び賜ふとの意なり○勅旨　大御言にて遣唐大使たるべき勅命をいふ○戴き持ちて　謹みうけたまはりての意○罷りいませ　マカリは參ルまゐの反對にて總て上より下に退く意なり　イマヒは往に座せの意なり　さて此處は罷りいませばといふ意なるをバを省きていませとのみ云へるは語勢を強むる上より用ゐる古言の一格なり○神留りうしはぎいます　神留りは神鎮りの意なり　ツマルは塞ルにてやがて留ルと同意なり　ウシハグとは其の處の主として知傾する意の古言なり　ウシは主　ハクは太刀を佩クなどのハクと同語にて身に着くる意なりと　されば此處は海原の邊にも沖にも至る處に鎮り座して傾知し賜ふの意なり○導き申し　神等を船の舳に導き奉りて鎮め奉る意なり○倭大國靈　神名帳に大和國山邊郡大和坐大國魂神社とある

神にて須佐之男命の御子大年神の御子なり。この神は大和國にて大地主神として殊に崇め奉り又上古より朝廷にても殊に崇敬せられたることは天照大神と共に天皇大殿の内に並べ祭られたる事日本紀にもあるによりて知るべし。○ひさかたの。天の枕詞なること既に上にいへり。○天の御虚ゆ。ユはヨリの古言なり。○天翔り。天上を翔り賜ひての意。○事了り還らむ日には。無事使命を了へて唐國より還り來らむ日にはなり。○墨繩を延たる如く。墨繩とは工匠が直線をしるす爲に用ゐる具なり。墨を含ませたる細き麻繩にて之を材木などの兩端に強く引張りたる上控き放ちて黒き直線をしるしをつくるなり。ハエは延シの古言なり。さて此處は墨繩を延したる如く眞直に一筋にの意なり。○阿庭可遠志。值嘉の枕詞の如くには聞ゆれど意は未明ならず友人逸見ぬしの説には當所遠正にて船の目的地へ正しくと云ふ意なるべしと。○值嘉の岬。肥前風土記に松浦郡值嘉島在郡西南とありまた西有泊船之停二處遣唐之使從此停發云云とあり。本居翁は此島は今の五島平戸などの島々を總稱せるなるべしといはれたり。○大伴の。御津

の枕詞なること上にいへり。○御津の濱邊に。御津は難波の津のことなり。なほこの事は卷の始の憶本郷歌の處にいへり併せ見るべし。○直泊に。外には寄らずたゞ一筋に直様に泊つる意なり。○つゝみ無く。恙無くと同意なり。ツ、ミは包ミと同語にて凶事は總て包み憚るべき事なるにより總て凶事をツツミといふなり。○幸くいまして。イマシは座シと解きたる説もあれど此處は往ニ座シテにて行き賜ひての意なり。

老身重病經年辛苦及思兒等歌七首

歌の末に天平五年六月丙申朔戊戌作とあり

たまきはる 内の限りは 平けく 安くも有らむを 事
 も無く 喪無くも有らむを 世の中の 憂けくつらけく
 いどのさて 痛き瘡には 辛塩を 灌くちふ如く 益

益も 重き馬荷に 上荷うつと 云ふ事の如 老にて有
 る 我が身の上 病をら 加へて有れば 晝はも 歎
 かひ暮し 夜はも 息つき明し 年長く 病みし渡れば
 月重ね 憂ひ吟ひ ことことは 死ななご思へご
 五月蠅なす 騒ぐ兒ごもを うつてては 死には知らず
 見つ有れば 心は燃えぬ かにかくに 思ひ煩ひ
 ねのみし泣かゆ

○たまきはる 内の枕詞なり 語意につきては上の哀世間難住歌の處に
 云へり○内の限リハ ヲチは現の意にて即ち生きてある現世の間はの意
 なり○安くも有らむを 安らかにマア有りたきものといふ程の意なり
 モは感動詞なり○事も無く 何事も無く即ち無事になり○喪無くもあら
 むを 喪とは必ずしも死したる事のみにあらず廣く凶事をさしていふなり

本居翁はモは凶事の約言なりといはれたり○憂けくつらけく ヲケク
 は憂くの延言 ツラクは今も口語にツライといふに同じく難儀の意なり○
 いとのきて 貧窮問答の歌にも云へる如くイトドシクと一つにて一層甚
 しくの意なり○痛き瘡には辛蓋を漉ぐちふが如く 貧窮問答の歌に短き
 物を端截ると云へると同意の諺にて痛き瘡の上に辛蓋を漉げば一層甚しく
 苦しきなり 漉ぐちふのチフはト云フの約言にも今も九州あたりには普通
 に用ゐらるる辭なり○益益も 上のいとのきての對語にてイヤガ上ニモの
 意 モは感動詞なり○重き馬荷に上荷打つ 重荷に小付けといふと同じ
 意の諺なり 上荷は既にある上に加へてつくる荷をいふ○老いにてある
 老い果ててあるといふ程の意なり 老いにのニは 舊りにし里 散りに
 けり などのニにて過去の助動詞なり○病をら このラは妹等子等など
 いふラと同じくなどの意なりと解ける説も有れどなほ思ふにこのラは 稀
 ラ 野ラ などのラと同じく別に意味なき一種の接尾語即ち添へ辭なるべ
 し○晝はも モは感動詞にてマアといふ程の意 下の夜はものモも同じ○

歎かひ暮し 歎カヒは歎キの延言なり 歎きて日を暮すとなり○息づき
 明し 息づくとは歎息する意なり 歎息して夜を明すとなり○憂ひ吟ひ
 貧窮問答の歌にいへり○病し渡れば シは強め辭 渡ルとは事の引
 續くに云ふ 引續きて病みて居ればなり○ことことは 他の事は願みず
 と云程の意なり 死なすのナは願ふ意の辭にて死ニタイといふ程の意なり
 幼き子故にこそ命も惜しくあれ其の他の事ならば辛苦の餘り寧ろ死なむと
 思へどとなり○五月蠅なす 五月蠅の如くの意 蠅は五月の頭殊に群り
 騒げばなり○打棄ては死には知らず ウツテはウチステの約言なり 兒
 等を後に打棄てて死ぬるといふ事は知らず即ち到底知ぬる事を得ずの意な
 り○見つつ有れば 見つつは愛けくつらけき事を見つつ有ればの意なり
 と説けるも有れどなほ思ふに愛らしき兒等を常に見て居ればの意なるべし
 ○心は燃えぬ 愛情燃え立ちて抑へ難き意なるべし○かにかくに思ひ煩
 ひ とやかくやと思ひなやむ意なり 辛苦の餘りには一層死なむかとも
 思ひまた愛らしき兒等を見ては命を惜しとも思ひとや爲む斯くや爲むと思

ひなやむ意なり○ねのみし泣かゆ ネは音にてシは強め辭なり 音に立
 ててひたすら泣かるとなり 泣かゆは泣かるの古言にて我知らず覺えず泣
 かるる意なり

反歌

慰むる 心は無しに 雲隠れ 鳴行く鳥の 音のみし泣かゆ

○一首の大意は心を慰むる事としては少しも無く唯一筋に苦しく悲しきのみ
 なれば雲間に隠れて往方も知らず鳴行く鳥の如くひたすら音に立てて泣か
 るる事よとなり

術も無く 苦しく有れば 出走り 性ななと思へど 兒等に
 障りぬ

○一首の大意は爲む方も無く苦しければ一層走り出でて何處かへ行きてし

まいたしとも思へざいとしき兒等に妨げられてそれも叶はぬ事よとなり
サヤリはサヘリの古言なり

富人の 家の子どもの 着る身無み 腐し棄つらむ 絹綿等は

○着る身無み 着る子の無きによりての意なり 無ミのミは 山高ミ
風寒ミ などのミにてサニまたニヨリテの意なり ○腐し棄つらむ クダ
シはクサラシの古言なり ○絹綿等はも 其の絹綿なごハマアといふ程の
意にてさても惜しく羨ましく儘ならぬ事よなどの無量の餘情を含めたるな
り
一首の大意は世の富人の家には有餘るばかり温き絹綿なども有らむを着す
る子どもの無き爲にあたら腐し棄つるならむよ さるを吾はいとしき子等
に粗末なる着物をさへ思ふままに着する事もならぬ事よ 思へばさてもい

とはしく苦しく悲しやとなり

荒布の 布衣をだに 着せがてに 斯くや歎かむ 爲む術を
無み

○荒布の 荒布は危布にて和布に對し麻にて粗く織れる布帛をいふ タ
へは古へ布帛の總稱なり ○布衣をだに ダニは口語にサへといふに同じ
○着せがてに 着せ難くしての意なり ガテニは難氣ニの約なりといふ
○爲む術を無み 瀬を速み 風を痛み などの格にてヲは感動詞 ミは
サニといふ程の辭にて即ち爲む術無さにといふ程の意なり
一首の大意は愛らしき子等にはせめて布衣なりとも着せたく思へども其の
布衣をさへ着することもならず何とも爲む術無さにいたづらに斯く歎きて
あらむか さても苦しく堪へがたしやとなり

水沫なす 微き命も 栲繩の 千尋にもがと 願ひ暮しつ

七八

○水沫なす微き命も 水の沫の如く微くはかなき命もなり ○栲繩の栲繩とは穀の木の皮にてつくれる繩にて長き意の枕詞となれるなり ○千尋にもがと モは感動詞 ガは願ふ意の辭なり 栲繩の千尋に長さが如何時までも生き長らへたしとの意なり 一首の大意は水沫の如く微くはかなき命なれば惜しむに足らず むしろはやく息絶えてこの苦痛を免れたしとまで思へど其のはかなき命も子故には何時までも生き長らへたしとひたすら願ひ暮したりとなり

倭文環 數にも有らぬ 身には有れど 千年にもがと 思ほゆるかも

○倭文環 數の枕詞なり 倭文は上にも云へる如く古の綺織なり 環は

此處にては芋環の事なり 芋環は横芋を巻きたるものにて俗にヘソといふ 倭文を織るには數多の芋環を要すれば數多き意にかかる枕詞となれるなり ○數にも有らぬ 人數にも入らぬにて人並ならず貧賤なる意なり 大意は吾は人並ならず貧賤しき身には有れど然も千年までも生き長らへたしと思はるる事なるよとなり この歌の末に去神龜二年作之但以類故更載於茲とあり 即ち右の一首は神龜二年に作りたるなれども前と同じ類の歌なれば更に此處に並べ載せたりとなり

戀男子名古日歌三首

古日といへるは愛兒を失ひて悲しみ戀ふる歌なり さらぬだに子故の間に迷ふならひなるをまして其の愛兒を失ひて狂せむばかりの親の眞情紙表に滿ち溢れて悲惨讀むに堪へず

七九

世の人の 貴み願ふ 七種の 寶も我は 何爲むに 願
 ひ欲りせむ 我が中の 産れ出でたる 白玉の 吾子古
 日は 明星の 開くる朝は 敷布の 床の邊去らず
 立てれども 居れども共に 搔撫でて 言問ひ戯れ 夕
 星の 夕にあれば いざ寝よと 手を携はり 父母も
 上はな放り 三枝の 中にを寝むと 愛しく しが語へ
 ば 何時しかも 人ご成り出でて 悪しけくも 善けく
 も見むと 大船の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の
 俄にも 覆ひ來ぬれば 爲む術の たごきを知らに
 白布の 襟を掛け まそ鏡 手に取持ちて 天つ神
 仰ぎ乞ひのみ 國つ神 伏して額衝き かからずも か
 かりも 神の まにまにこ 立あざり 我が乞ひのめご

しばらくも 善けくは無しに 漸漸に 容くづほり
 朝なさな 言ふ言止み たまさはる 命絶えぬれ 立跳
 り 足摩り叫び 伏し仰ぎ 胸打歎き 手に持たる 我
 が子飛はしつ 世間の道

○七種の寶 金銀瑠璃碎磔瑪瑙珊瑚琥珀をいふなりと○願ひ欲りせむ
 この句は原本には無けれど此處に七言の句脱ちたるなるべしとて古義に
 補へるによりて加へたり○我が中の 我等夫婦の中にて下の吾子とい
 ふにかけて見るべし○白玉の 白玉の如く麗しく愛らしき意なり 土佐
 日記に貫之が死にたる愛兒を戀ひて「忘れ貝拾ひしもせず白玉を戀ふるをだ
 にも形見と思はむとなむいへる をんな子のためには親をさなくなりぬべ
 し 玉ならずもありけむをと人いはむや されど死にし子顔よかりきとい
 ふやうもあり」と記せり 我が兒を玉の如く愛でいつくしむは何時もかは

らぬ人の親の情なりけり○明星の 所謂明の明星みんせうのめいせいの古名なり この星は金星といふ星には夜の明方と日の入頃いりぐらにことに赤く耀あやきて見ゆるを其の明方の時を古くアカボシといひ夕の時をユフヅツといへり さて此處は明星の耀く朝とかかるなり○敷布の床の枕詞なり 敷布は所謂敷布團敷布團のことなるが或はハシキは繁はキにて織目の繁はく密なる布帛の意なりともいへり 廣く衣袖枕床などの枕詞に用ゐらる○床の邊去らす 床のあたりを離れずなり○立てれども居れども 立ちてありても座りて居りてもなり○搔撫搔撫でて言問ひ戯れ 搔撫搔撫でて言問ひの語は原本には無けれど古義に補へるによりて加へたり タヘレはタヘムレと同じ 此處は親子の親しみ睦むつへる様なり○夕星の 所謂夕の明星の古名なり○いざ寝よと イザはサアと誘ふ詞なり○上はな放り ウへとはホトリ又アタリの意なり ナサカリは放る事勿れにて即ち傍を離るるなの意なり○三枝の 中の枕詞なり 冠辭考に福草の事にて一つの莖の末に三の枝あり さて三つ有ものは中あることわりなれば集中に三粟の中とも云かけたるに同じと云へり 三枝

につきては説あり 或は山百合のことなりとも薺さかのさかことなりとも云ひ確ならねど何れにしても此處は中の枕詞なり○中にを寝むと ヲは感動詞なり 兩親の間に寝むとなり○愛しく 愛あいらしくの意○しが語らへば シガは其かガといふ程の詞にて其の古日が話せばの意なり○何時しかも人と成り出て 何時の間にかマア成人しての意なり○悪しけくも善けくも云云 アシクク ヨククはアシク ヨククの延言なり 悪くとも善くとも兎に角其の生先を見むと楽しみ頼みたるにの意なり○大船の 思ひたのみ枕詞なり 荒海の上は唯ひとへに大船をたのみにすればたとへて云ひかけたるなり○横しま風の横様風にて横様に吹き荒るる風なり さてこの横しま風は病魔をたとへて云へるなり○俄にも この句原書の一本には爾母布敷可爾とあり 又一本には爾母布敷可爾布敷可爾とありて訓も意も明ならず 今本居翁の布敷は爾波の誤 爾母は亂れて上に入たるにて爾波可爾母なるべしとの説によりて改め譯せり○たどきを知らに タドキはタヅキに同じくタヨリ又ヨリドコロの意なり 知ラニは知ラズニの意なり

り○白布の　タへは例の布帛の類なるが白布といふは綴つむにて織れる布にて殊に色白き物なればいへり　さて白布は廣く雪衣袖襷などの枕詞となれり○襷を掛け　襷を掛けて神に獻る供物などを取まかなふさまにて即ち神を祈ることをいふなり○まを鏡手に取持ちて　マソ鏡はマソ鏡なり　マソ鏡は眞澄鏡にて曇りなく澄み渡りて明かなる鏡をいふ　さてこの鏡を手に取持つは神に供へむ爲なり○仰ぎ乞ひのみ　天を仰ぎて天つ神に愛兒の病氣の平癒を乞ひ願ふとなり　ノミは願ふ意の古言なり○伏して額衝き　地に伏して國つ神に禮拜すとなり　ヌカツクは頭を地に着けて禮拜する様なり○かからずもかかりも云云　神の御恵にかかるともかからざるも唯神の御心に任せ奉りての意にてさて斯く真心をこめて切に祈り奉る上は神も納受し賜はぬ事もあらじとの下心を含めたるなり(この處語句少し亂れたるやうなり)　て古義にはカカラズもカカリシヨシヨシノ天地ノ神ノマニトニテは語數足らず整はげにカガリモ神ノは通例七言五言なるベキ所なればこの儘にては語數足らず整はぬやうなれどなほ思ふに四言三言なみの句も例なき事にあらずに是れは原本のまゝにせり　○立あざり　アザリの語意確ならず　契沖は俗に心いられていかにかにせむとさ

わぐをあせるといふこれなるべしといひ古義は土佐日記に上中下酔過ていとあやしくしは海のはとりにあざれあへりとあるあざれと同意にてとりみだしさわぐさまをいふなるべしと云へり(アザリは普通下二段活用の詞なれば際も活用せしむといふ古くは四段)　○形くづはり　クヅホレは頼れ衰へ行くさまなり○朝なさな　朝な朝なの略にて毎朝の意なり　朝なのナは夕なに對しもと倣肴の意なるが何時しか其の意を失ひて單に朝夕の意となれるなり○言ふ言止み　衰へ行きて物言ふことも無くなる意なり○命絶えぬれ　命絶えぬればとあるべきを例のバを省ける古格なり○立跳り足摩り叫び　跳り上り足摩りなぞして叫ぶ意にて恰も小兒のダダヲコネテ泣き騒ぐ如き様なり　堪へ難き悲しみに恰も小兒の如くなりて泣き狂ふさま悲惨讀むに堪へず○伏し仰ぎ　天を仰ぎ地に伏して歎き悲しむなり○胸打歎き　抑へ難き苦悶の餘り胸を敲きて歎く様なり○我が子飛しつ　契沖の説にいづくともゆくさきしらすなるをば手にすゑたらむ應などをあやまりてそらしやらむに似たりと云へり　飛シツの語思ひきりたる詞遣ひなる

と共に手の中の玉を失ひて茫然悵然たる様目の前に浮ぶやうなり○世間の道 この結局突然なるが如くもの足らぬが如くなれども然もよく思へば其の無常なる世を今更に歎き恨み悲しめる情愈深く愈切なり

反歌

若ければ 道行き知らじ 幣は爲む 下方の使 負ひて通らせ

○道行き知らじ 冥途へ行く途を知るまじの意なり○幣は爲む マヒとは總て禮物として神などに奉る物また贈物をいふ マヒナヒ(賄賂)のマヒもやがてこのマヒなり○下方の使 冥途の使をいふ○負ひて通らせ 背に負ひて通り賜へよの意なり 通ラセは通りマセの約にて通り座セヨの意なり

一首の大意はあはれ我が子古日は見も知らぬ冥途へ行くべきことなるがまだ幼少なれば冥途の途も知るまじ定めて難儀することならむ あはれ冥途の使よ禮物を數多贈るべければ何卒幼兒を背に負ひいたはうて行きたくれよとなり

布施置きて 吾は乞ひのむ 欺かず 直に率行きて 天道知らしめ

○布施置きて 布施とは普通僧侶に施し與ふるものを云へど此處は佛に奉る物をいふ○直に率行きて 古日を直につれて行きてなり○天道知らしめ 天上への道を知らしめ賜へよとなり シメヨといふべきをたしシメとのみいふは古格なり 天道とは佛説にいふ六道の一なり 六道には三善道と三惡道とあり 其の三善道の一なる天上道といふもの即ち此處にいへる天道なり

一首の大意は敷多布施を積置きて吾はひたすら佛に乞願るよ 何卒經文にも説かれたる如く欺く事なく早く直に古日をつれ行きて天上道を知らしめ賜へよとなり

山上臣憶良沈病之時歌一首

沈病は病に沈む意なり

本歌の末に右一首山上憶良臣沈病之時藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之狀於是憶良臣報語已畢有頃拭涕悲嘆口吟此歌とあり
藤原朝臣八束は藤原真楯の初の名なり 真楯は房前の子にて聖武帝の寵遇を受け大納言兼式部卿となりて薨せり 頗る書籍を好み殊に奈良朝の歌人として其の吟詠は萬葉集中にこれ見えたるほどなれば憶良とは親好ありしなるべし

士こゝろやも 空くわしかるべき 萬代まんだいに 語りかた繼つぐべき 名なは立たてず

して

○士こゝろやも空くわしかるべき 苟なほくも丈夫ちゆうぶたる者は何の爲ためす事も無く空くわしくあるべき事かはやア 決して空くわしく有るべき事にあらずの意なり
一首の大意は苟なほくも大丈夫ちゆうぶたる者は萬代まんだいの後までも世に語り傳つたふべき程の功名を立てずして何の爲ためす事も無く空くわしく朽くち果はつべき事ならむやは ざるを吾は何の爲ためす事も無く斯かく病やまに沈しみていたづらに朽くち果はてむ事よ さらても口惜くわしく悲かなしやとなり
博學多識天稟の才を抱き然も世事意の如くならず轉ま轉ま困こ憊ひの中なかに空くわしくこの世を辭あげむとす この勇壯にして然も慘憺たる口吟を耳にする者誰か一掬の涙をそゝがざらむや

山上臣憶良七夕歌十二首

七夕とは陰曆七月七日の夕にて所謂棚機と彦星と天の河に會合する夜のことなり

七夕の事はもと支那の故事より出でたり 先づ七月七日といふ事は事物紀原といふ書に吳均續齊諧記曰桂陽成武丁有仙道忽謂其弟曰七月七日織女當渡河暫詣牽牛至今云織女嫁牽牛とありても桂陽の成武丁といふ人の云ひはしめたることなりといふ

又一年に一度會ふといふ事は荆楚歲時記といふ書に天河之東有織女天帝之子也年々織杼勞役織成雲錦天衣天帝憐其獨處許嫁河西牽牛即嫁後遂廢織經天帝怒責令歸河東但使其一年一度相會と見えたり この夕庭に机を立て酒菓を供へ又五色の絲を竿に懸けなどして女どもの巧を祈りなどする事も總て漢土に行はれたり

さてこの七夕の風習は古くより我が國に傳はりて孝謙天皇の頃よりは朝廷にても乞巧奠として表立ちたる儀式ともなりたり なほ國語にタナバタといふは本居翁の説に棚機は機織女を云そは先古語拾遺に令天棚機姫神

織神衣と見え又萬葉の歌に棚機津女とも棚機ともよめる此は本棚機と云は機のことにてそを織神なる故に棚機姫と名にも負給ひ又凡て機織女を古より棚機津女と云しに依て歌に彼織女星をも然賦るなり 抑七月七日夜牽牛織女と云二星の交會と云は漢籍に云ることなるを此間にもならひて歌に多くよめるにいはゆる天漢を天之安河とよみ織女を棚機つ女とよめるなどみな似つかはしきままにおしめてに當たるものにてそはたゞ漢國にて詩に作るにならひて此方にもたゞ歌によめるのみにこそあれ實の事にはあらず云とあり 要するに七夕の事はもと漢土の想像説に出で確たる事跡の存するにあらず

天の河 相向立ちて 吾が戀ひし 君來ますなり 紐解き設けな

○天の河 天上なる河なり ○紐解き設けな 紐とは下紐のことなり
下紐は夫婦の間なら ねば解かぬならひなり マケはマウケの古言なり
一首の大意は天の河邊に立ちて彦星の方に向ひて今か今かと待戀ひたりし
君は今や來ますなり いさや下紐を解く用意を爲むとなり 棚機になりて
よめる歌なり

右養老八年七月七日應令作之

續日本紀によれば養老八年二月に年號を神龜と改められたる事見ゆれ
ば此處に八年とあるは七年の誤ならむかといふ

ひさかたの 天の河瀬に 船泛けて 今夜か君が 我がり來
まさむ

○ひさかたの 天の枕詞なり ○我がり來まさむ 我がりは我が許にの
意なり ガリはノ許にの意の古言なり 妹の許に君の許にを妹ガリ君ガリ
など云ひ又ノといふ辭を入れて人ノガリなどとも云へり

右神龜元年七月七日夜左大臣宅作之

左大臣は長屋王のことなり

彦星は 棚機つ女と 天地の 別れし時ゆ いなむしろ
河に向立ち 思ふそら 安からなくに 嘆くそら 安
からなくに 青浪に 望は絶えぬ 白雲に 涙は盡きぬ
斯くのみや 息つき居らむ 斯くのみや 戀ひつつ有
らむ さ丹塗の 小船もがも 玉纏の ま權もがも 一

云 小棹もがも 朝風あさかぜに い搔かき渡り 夕塩ゆふしほに 一云 夕べにも
 い漕こぎ渡り ひさかたの 天あまの河原がはらに 天飛あまぶや 領りやう
 布片敷ふかたき 眞玉手またまての 玉手たまてさし交へ あまたたび 宿しゆくも
 寝ねてしがも 一云 いもさ寝てしか 秋あきに有らずとも 一云 秋待た
 ずとも

○天地の別れし時ゆ 天地開闢の始よりの意なり○いなむしる 河の枕
 詞なり 語意は寢席いねざにて皮をつづけたるなりとも云ひ又稍席即ち藁の席に
 て強しといふ意にいひかけたるものなりと云へり○思ふそら安からなくに
 思ふそら又下の嘆くそらのソラは此處にては心地といふ程の意なり
 安カラナクニは安カラヌニの意なり○青浪に望は絶えぬ 略解には立浪
 にさへられて望見することも絶る也といひ古義にも遙々の蒼浪を望み見やる
 に遠くして見届かねば目のつきたるをいふならむと解きたれどなほ思ふに

望は絶えぬとは所謂絶望の意にて遙々の蒼浪を見ては到底渡り行きて彦
 星に會ふことの望も絶えたりとの意なるべし○白雲に涙は盡きぬ この
 句も略解には雲を見て涙の限り泣盡す也といひ古義にも天雲をふりさけ望
 むに戀の涙のかぎりの盡ぬるを云ならむと解きて少しおぼるげなれどなほ
 思ふにこも反歌に風雲は二の岸に通へどもとあれば白雲の彼方此方に行
 通ふを見るにつけても我が身の思ふままに彼方に行きて彦星に會ふことな
 らぬかなしさに涙を盡すの意なるべし○斯くのみや息づき居らむ 斯く
 ばかり徒に嘆息して居るべき事かとなり○さ丹塗の小船もがな さ丹塗
 のサは例の接頭語 丹塗は赤く彩色したるをいふ 萬葉集中に赤乃曾保船
 赤羅小船ともよめり モガナのモ又ナは何れも感動詞 ガは願の辭なり
 されば丹塗の小船がマア有ればよきにナアといふ程の意なり○玉纏のま
 櫛もがな 玉纏とは玉を纏きて飾りとしたるなり ま櫛のマは眞にて美
 稱なり○朝風に 朝の間浪風の程かなるをいふ○い搔き渡り イは例
 の接頭語 搔キは水を搔く意なり○夕鹽に 天の河に潮をいへるは理に

合はぬやうに聞ゆれどももとより想像説に過ぎざれば總て天河を海の如く
 見たててよみなしたるものと知るべし○天飛や領布片敷き 天飛ふやの
 意は明ならず 或は天上の事なれば冠らせたるのみと云ひ又織女之天津領
 布とよみぬるなを思ふに天女といふものの虚空飛行には必ずこの領布を
 着るよしありとおぼえたりといへり 又は普通は袖片敷といふべきを天女
 なれば領布片敷といへるなるべきか○真玉手の玉手さし交へ 眞は美稱
 言 玉手は玉の如く麗しき手なり 織女と彦星と手をさし交して共寝する
 さまをいへり○あまたたびいもねてしがも あまたたびは數多度にて幾
 度も意なり○いもねてしがもは 安らかに寝たきものであるマアとい
 ふ程の意なり(この遠原本に 餘宿毛腰而可聞とあり 略解は 多の字脱たるに
 餘多にてあまたたひて記せり)

反歌

風雲は 二の岸に 通へども 吾遠孀の 一云 はし孀の 言
 を通はぬ

○遠孀 遠方にある孀なり ツマとは夫婦互によぶ稱なり(一云は愛孀の
 意なり)

一首の大意は風と雲とは常に天河の彼方此方の岸に往來すれども吾等は秋
 にあらねば相見ることかなはず なつかしき遠孀の言傳も通はぬ事よと
 なり

礫にも 投越しつべき 天の河 隔てればかも 餘多術無き

○礫にも投越しつべき タプテはツプテの古言なり(或説に 原本多夫手二
 云へり 平なりけむな手と混へ又二に誤れるなるべし)礫にても投ぐれば彼方の岸に

越し届くべき程近しの意なり○あまた術無き 甚しく爲む方無き意なり
一首の大意は天の河の渡は磯を投ぐれば彼方の岸に届くばかり誠に近くは
あれども會ふこともならず斯く隔りて居ればにや誠に爲む方なく戀しく思
はるるとなり

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河作一云帥家作

天河の下に作の字脱たりとの説によりて之を補へり 帥家とは太宰帥
大伴旅人卿の家なり

秋風の 吹きにし日より 何時しかこ 吾が待戀ひし 君ぞ
來ませる

歌の意かくれたる處なし

天の河 いと河浪は 立たねども 伺候難し 近き此瀬を

○いと河浪は イトは甚の意にて下の立たねどもにかかれり○伺候難し
サモラヒはサブラヒの古言にて側近く伺候し居る意なり 此處は彦星の側
近くに親しく伺候し難しの意なり 一首の大意は天河の河浪は甚しく立た
ねどもたやすく渡ることを得ねばなつかしき彦星の許に至り側近く伺候す
ることも叶ひ難し あはれ遠く隔てればこそ思ひあきらめせめ この近
き渡り瀬なるものを さても口惜しやとなり

袖振らば 見もかはしつべく 近ければ 渡る術無し 秋に
し有らねば

○袖振らば 袖を振るは戀しき情をあらはす古の風習なり○見もかはし
つべく 河を隔てて互に見合すことを得べきばかりの意なり 歌の意

かくれたる處なし

陽炎やうえんの ほのかに見えて 別わかれなば もとなや戀こひひむ 會あふ
時ときまでは

○陽炎の ほのかの枕詞なり カギロとはカゲロヒともカゲラフともイト
ユフともいへり 春の長閑なる日火氣の如く空中に立上りて見ゆる氣をい
ふ それより陽炎の燃ゆる春日などいひ又ほのかといふ語にいひかくるな
り ほのかに かすかに又口語にチラトといふ程の意なり○もとなや
もとなは上の思子等歌の處にいへり
一首の意は唯かすかに相見えたるばかりにて満足するばかり親しく語らふ
間も無くはやくも別れてしまはばまた來年の秋相會ふ時までにはムセウに戀
しく思ひつゝ過さむか さてもはかなしやとなり

右天平二年七月八日夜帥家集會

牽牛けんぎゅうの 嬬めづ迎へ船ふね 漕こ出らし 天あまの河原かはらに 霧きりの立たるは

○霧の立るは 略解には夕霧の立つを見て今や妻迎舟漕出らむと思ふ也
と解きたれどなほ古義に彦星の織女を迎ふる船をこぎゆくさわぎに水霧の
立るならむといふなるべしと解ける方穩當なるべし

霞かすみ立たつ 天あまの河原かはらに 君きみ待まちつと い通とほふ程ほどに 裳かほの裾すそ沾ぬれぬ

○霞立つ 霞は必ずしも春のみにいふにあらず 此處は河霧などにうち
かすめる様をいふなるべし○い通ふ程に イは例の接頭語 通ふは彼方
此方に往還する意なり
一首の意は天の河原に出てなつかしき君を待つとして此處に御船泊てむか彼

處に御船泊てむかと彼方此方に行き通ふうちには裳の裾もいたくぬれたるよ
となり

も 天の河 浮津の浪音 騒ぐなり 吾が待つ君し 舟出すらし

○浮津の浪音 浮津といふこと明ならず 眞淵翁の浮は御の誤にてミツ
ノナミノトならむとの説穩當なるべし さすれば御は美稱言 津は此處に
ては天河の渡し場をさせるなるべし ○騒ぐなり ナリは咏歎の辭にてワ
イといふ程の意なり
一首の意はあはれ天河の河津の浪が頻りに騒ぐ音が爲るよ さては我がひ
たすら待ち居る君が今や舟出して來賜ふらしマア さても待遠やとなり

山上臣憶良詠秋野花歌二首

一其 秋の野に 咲きたる花を 指折り かき數ふれば 七種の花

○指 オヨビはユビの古言なり 土佐日記に 今日いくか廿日三十日と
かそふればおよびもそこなはれぬべしとあり
歌の意かくれたる處なし

二其 萩の花 尾花 葛花 瞿麥の花 女郎花 又藤袴 朝貌の花

本歌は所謂旋頭歌なり 旋頭歌は五言七言七言の句を二つ重ねたるものに
て歌の一體なり ○尾花 薄の穂に出でたるにいふ稱なり ○朝貌の花 朝
貌は今普通には牽牛子をのみいへど古くは權をも朝貌といへり 權の花は

朝開き夕に萎むものなれば横花一日之榮などといへるなり さて本歌にいへる朝貌は牽牛子をさしたるか或はこの横花をさしていひたるか明ならず 今所謂秋の七草にはこの朝貌の代りに桔梗の花をいへり

註釋 山上憶良歌集終

明治四十三年九月廿八日印刷
明治四十三年十月一日發行



著作者 宇治山田市榎町三十八番地 井上頼文
 發行者 東京市本郷區本郷五丁目廿五番地 梁川保嘉
 印刷者 東京市小石川區小日向町三丁目四十三番地 佐伯外美雄
 印刷所 東京市小石川區小日向町三丁目四十三番地 大日本慈善協會活版部 八洲舍
 發行所 東京市本郷區本郷五丁目廿五番地 會通社

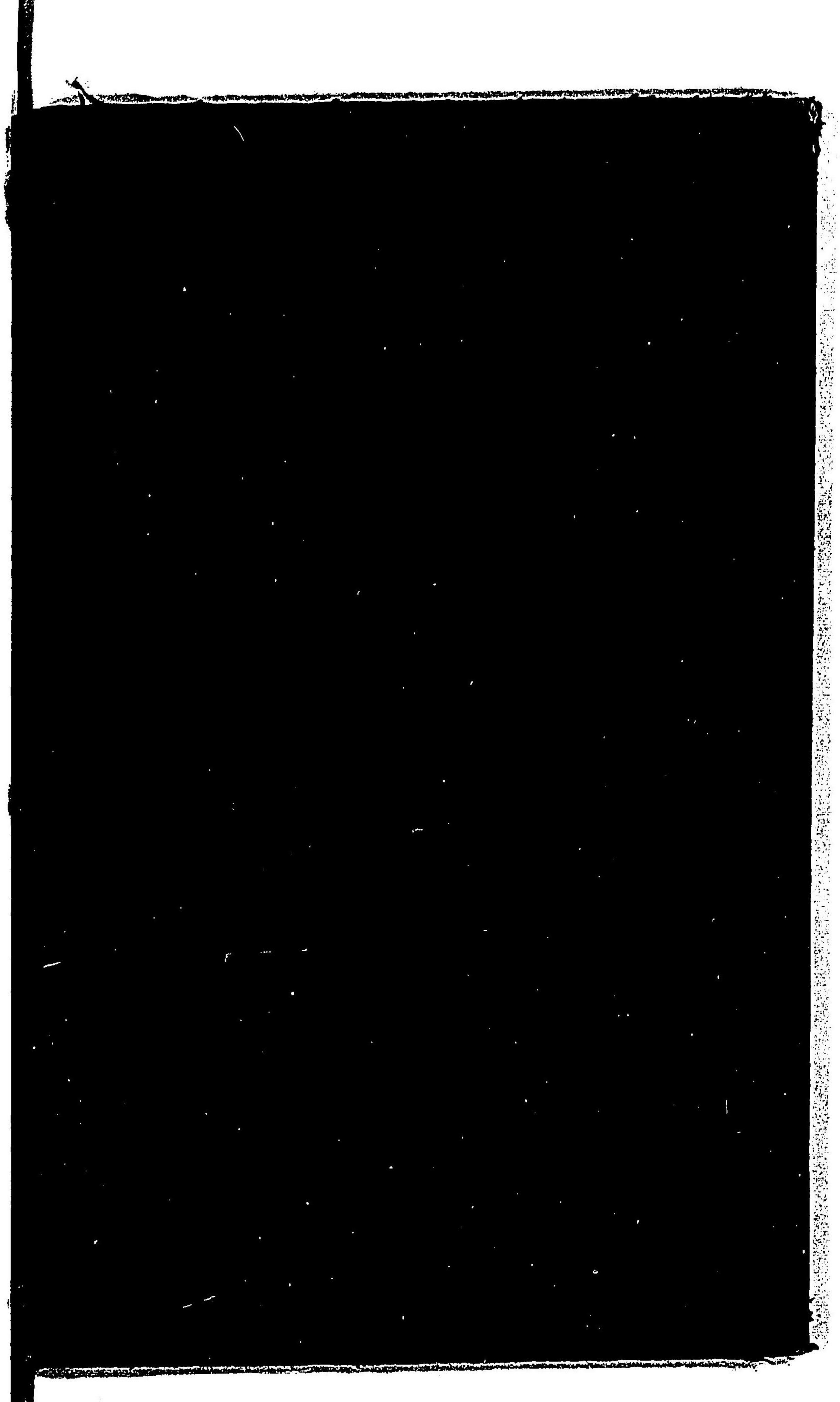
○賣 捌 書 肆

東京市神田區表神保町	東京	川勝鴻寶堂
東京市神田區錦町二丁目	明治書院	鹿田靜七
東京市神田區鍛冶町	誠之堂	古川小三郎
東京市日本橋區數寄屋町	六合館	加藤長平
東京市京橋區五郎兵衛町	須原度書店	石丸莊平
京都市寺町通綾小路南入		
大阪市東區安土町四丁目		
宇治山田市岡木町		
宇治山田市一志久保町		
宇治山田市八日市場		

329
886



827
336



527
336

086740-000-4

327-336

山上憶良歌集

井上 頼文 / 著

M43

DBD-1948



